法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

沖縄伊江島方言の語アクセント

生塩, 睦子 / OSHIO, Mutsuko

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
17
(終了ページ / End Page)
94
(発行年 / Year)
1985-03-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002714

Hosei University Repository

沖縄伊江島方言の語アクセント

生塩　睦子

はじめに

沖縄北部方言に属する伊江島方言の，語アクセントについて報告する。

筆者は，先に当方言アクセントについての概略註1および複合名詞のアクセント註2について報告しているが，小稿はそれらを含め全面的に改稿し，当方言語アクセントの詳細な報告を目的とする。

調査資料は，昭和39年８月から42年８月まで134日間の現地調査中に得られたものと，昭和54年３月から59年３月まで毎年１週間の現地調査で補充したもの，あわせて5500余語である。

調査対象者は，７歳から103歳までの男女ほぼ全地区（戦後できた阿良・西崎・真謝の三か字を除く）約90名であるが，本稿記述の基準になったのは東江上地区の純枠方言話者知念勘蔵氏（明治34年生）の言語である。

2　伊江島方言アクセントの概観

純枠な伊江島方言のつかい手知念勘蔵氏は，「葉」のことを [p‘a:] と発音し，「歯」のことには [pa‘:] のようにあと上がりになるときもあり，[p‘a:] と高く平らになるときもある。同様に，「毛」には [k‘i:]，「木」には [k‘i:] または [k‘i:] であり，「着る」には [t‘ʃuŋ]，

Hosei University Repository

「切る」には［t'ʃuŋ］または［t'ʃuŋ］である。「鼻」は［p'ana］であるが，「花」は［p'ana:］とも［p'ana:］とも［p'ana:］とも聞える。これに助詞「が」が付くと，「鼻が」は［p'ananu］で，「花が」は［p'ananu］と聞えるときもあり［p'ananu］のときもある。

このように知念氏のアクセントは上がり方が曖昧である。上がっても低から高への音声差が小さいし，高く平らのままのときもある。下がり方ははっきりしており，高から低への音声差が大きく，下がり目が語によって決まっており，時により場合により変わる，ということはない。

これが若年層の話者になると上がり目がはっきりしてきて，きわめて明瞭な一音卓立のアクセントとなる。

年齢によってどのような違いが見られるか，古老層・老年層・中年層・若年層いろんな人々のアクセントを調べてみた。そのうち，次の東地区6人のアクセントを数語選んで表示してみる（表1）。

表1　伊江島方言アクセントの音相　―上がり下がりの様子―

調査語 ＼ 被調査者（居住地・年齢）	饑間德助氏（東江上・78）	知念勘蔵氏（東江上・64）	東江正有氏（東江前・47）	知念正一氏（東江上・43）	内間亀吉氏（東江前・30）	棚原慈保氏（東江前・21）
薬 〔p'a：〕	○○	○○	○○	○○	○○	○○
歯 〔p'a：〕	○○	○○	○○	○○	○○	○○
鼻 〔p'ana〕	○○	○○	○○	○○	○○	○○
花 〔p'ana：〕	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
足駄 〔ʃaʃidʒa〕	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
欠伸 〔ʃak'udi〕	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
東 〔ʃa:ri〕	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○	○○○
とかげ 〔wak'ubit'ʂi〕	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
蛙 〔ʃat'adik'a〕	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
埃 〔p'uk'uʃimu〕	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
脂肉 〔ʃandadʒiʃi〕	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○
玉九年母 〔t'amakunibu〕	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○
人参 〔ʃahade:kuni〕	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○

（昭和41年8月調査）

Hosei University Repository

78歳の古老のアクセントはどの語でも下がり目まで高く平らである。40歳前後以上の老中年層では，下がり目直前の音節がそれまでより少し高く発音される。30歳以下の若年層では，下がり目直前の音節だけが高くなる。殊に20歳前後の若者は男女ともどの語でも卓立式アクセントである。そして，下がり方はどの年齢層でも明瞭である。話者自身も下がり目がわかる。

伊江島方言のアクセントは，下がり目すなわち下り核がどこにあるか，でとらえるのが妥当であろう。

当方言アクセントの音韻的型は，次の６つのタイプに分けることができる。１音節を○[註3]，下り核を￣として例示する。

i　平板型（核をもたない）

○○，○○○，○○○○，○○○○○，……

ii　尾高Ⅰ型（最終音節に核がある）

$\overline{○}$，○$\overline{○}$，○○$\overline{○}$，○○○$\overline{○}$，○○○○$\overline{○}$，……

iii　尾高Ⅱ型（後から２番目の音節に核がある）

○$\overline{○}$○，○○$\overline{○}$○，○○○$\overline{○}$○，……

iv　中高型（第１・２音節及び後から１・２番目の音節，以外の音節に核がある）

○○$\overline{○}$○○，○○$\overline{○}$○○○または○○○$\overline{○}$○○，……

v　頭高Ⅱ型

○$\overline{○}$○○，○$\overline{○}$○○○，○$\overline{○}$○○○○，……

vi　頭高Ⅰ型

$\overline{○}$○，$\overline{○}$○○，$\overline{○}$○○○，○$\overline{○}$○○○，……

個個の語がどのアクセント型をとるか，調査した結果を集計してみた。全採集語彙のほとんどを占める６音節までの名詞・動詞・形容詞・副詞について，各アクセント型別に語数を示したものが表２である。

なお，表中の空欄はこれまでの調査で確認できていないが今後の調査で見つかる可能性のある意を，―印は音節配列上その他の条件からそのアクセント型の語は存在しない意，を表わす。

次に品詞ごとに考察を加える。

Hosei University Repository

表2　品詞別採集語数

	アクセント型	名詞		動詞		形容詞		副詞	
1音節語	$\overline{\bigcirc}$	—		—		—		1	1
2音節語	○○	51	477	7	15	—	1	3	21
	○$\overline{\bigcirc}$	363		—		1		16	
	$\overline{\bigcirc}$○	63		8		—		2	
3音節語	○○○	175	1132	58	113	—	68	1	57
	○○$\overline{\bigcirc}$	375		—		3		26	
	○$\overline{\bigcirc}$○	513		55		61		27	
	$\overline{\bigcirc}$○○	69		—		4		3	
4音節語	○○○○	11	1061	—	527	—	20		72
	○○○$\overline{\bigcirc}$	392		—		—		33	
	○○$\overline{\bigcirc}$○	366		304		10		22	
	○$\overline{\bigcirc}$○○	212		173		9		17	
	$\overline{\bigcirc}$○○○	80		50		1			
5音節語	○○○○○	2	688	—	402	—	79		32
	○○○○$\overline{\bigcirc}$	176		—		—		6	
	○○○$\overline{\bigcirc}$○	340		167		61		17	
	○○$\overline{\bigcirc}$○○	29		33		4		5	
	○$\overline{\bigcirc}$○○○	95		177		9		4	
	$\overline{\bigcirc}$○○○○	46		25		5			
6音節語	○○○○○○	3	282	—	182	—	13		15
	○○○○○$\overline{\bigcirc}$	65		—		—		1	
	○○○○$\overline{\bigcirc}$○	146		62		9		7	
	○○○$\overline{\bigcirc}$○○	7		3		1			
	○○$\overline{\bigcirc}$○○○	11		44				3	
	○$\overline{\bigcirc}$○○○○	43		49		3		4	
	$\overline{\bigcirc}$○○○○○	7		24		—			
品詞別採集語数		3640		1239		181		198	

3　名詞のアクセント

名詞のアクセント型の種類は，《音節数＋1》個あるが，各アクセント型の所属語彙に著しい片よりがみられる。以下，各音節名詞について，音節配列別（普通音節のみの語か，特殊音節を含む語か）からみたアクセントと，複合のしかたからみたアクセントとの二視点から考察していく。

(1)　2音節名詞

第2音節が普通音節（CV音節・CSV音節）か特殊音節（N音節・R音節）であるかに注目して2音節名詞を分類し，アクセント型別にまとめてみた。代表語例および採集語数を示すと表3のようになる。

表3　音節配列別　2音節名詞のアクセント

音節配列 / アクセント型	CVCV (N)	CVN	CVR	合計
○○	—	—	paR 〈歯〉 51	51
○$\overline{\bigcirc}$	pana$\overline{\text{a}}$ 〈鼻〉 351	'waN$\overline{\text{N}}$ 〈私〉 12	—	363
$\overline{\bigcirc}$○	$\overline{\text{ta}}$'i 〈二人〉 2		$\overline{\text{pa}}$R 〈葉〉 61	63
合計	353	12	112	477

2音節名詞のアクセント型は，平板型（○○），尾高Ⅰ型（○$\overline{\bigcirc}$），頭高Ⅰ型（$\overline{\bigcirc}$○）の3種類である。このうち，○○型と$\overline{\bigcirc}$○型は第

Hosei University Repository

2音節がR音節の時に，○$\overline{○}$型は第2音節が普通音節およびN音節の時に現れる。

CVCV配列すなわち普通音節のみの語では，尾高Ⅰ型（○$\overline{○}$）アクセントをとるが，第2音節がイ母音音節の時上例のように頭高Ⅰ型（$\overline{○}$○）をとることもある。以下に所属語例を掲げる。

例）『国語アクセント類別語彙表』の2音節名詞第1・2類の語群および第4・5類の多くの語が含まれる。

ʔusi〈牛〉，kuzi〈釘〉，kudi〈首〉（以上第1類），ʔutu〈音〉，hadi〈紙〉，tija〈寺〉（以上第2類），ʔuni〈海〉，pa'i〈針〉，ʔuṣi〈臼〉（以上第4類），ṣiju〈露〉，'uki〈桶〉，muhu〈婿〉（以上第5類），ʔazi〈鰓〉，mani〈畝〉，Nza〈下男〉など。

第2音節がN音節の語は多くない。ciN〈斤〉，siN〈千〉，'iN〈廊下〉のように全部○$\overline{○}$型で，$\overline{○}$○型の語は一例も確認していない。

第2音節が長音音節になるCVR配列では，平板型（○○）型か頭高Ⅰ型（$\overline{○}$○）のアクセント型をとる。伊江島方言には1音節名詞はなく，共通語の1音節名詞はすべて長音を伴い，○○型か$\overline{○}$○型かのアクセントで発音される。また，共通語2音節名詞が音韻変化をおこしてこの音節配列になる例も少なくない。

例）　平板型（○○）…1音節名詞のいわゆる第3類の語群が含まれる。

kiR〈木〉，paR〈歯〉，tiR〈火〉（以上第3類），piR〈屁〉，caR〈茶〉，ziR〈地〉，k'wiR〈杭〉，m'aR〈馬〉，ṣoR〈竿〉など。

頭高Ⅰ型（$\overline{○}$○）…1音節名詞のいわゆる第1・2類の語群が含まれる。

$\overline{ki}$R〈毛〉，$\overline{ci}$R〈血〉，$\overline{pu}$R〈帆〉（以上第1類），$\overline{na}$R〈名〉，$\overline{pa}$R〈葉〉，

$\overline{ti}$R〈日〉（以上第2類），$\overline{'i}$R〈亥〉，$\overline{ke}$R〈筍〉，

$\overline{du}$R〈自分〉，k$\overline{wi}$R〈声〉，$\overline{me}$R〈前〉，$\overline{pe}$R〈灰〉など。

○$\overline{○}$型名詞は，複合語の先行部分となった時，そのアクセント核を保存する語群（A）と後続部分にアクセント核を移動させる語群（B）とに分かれる。

<u>○$\overline{○}$（A）型語群</u>…da$\overline{ki}$〈竹〉，ha$\overline{zi}$〈風〉，hu$\overline{bi}$〈壁〉，ʔi$\overline{si}$〈石〉，'ju$\overline{da}$〈枝〉，ku$\overline{ci}$〈口〉，mu$\overline{ra}$〈村〉，ni$\overline{ci}$〈道〉，ṣa$\overline{ki}$〈酒〉，ta$\overline{di}$〈旅〉，ʔu$\overline{si}$〈牛〉，ʔu$\overline{ta}$〈歌〉など。

<u>○$\overline{○}$（B）型語群</u>…ʔa$\overline{tu}$〈後〉，gu$\overline{'i}$〈脚〉，hu$\overline{ga}$〈卵〉，ku$\overline{ni}$〈船〉，mu$\overline{tu}$〈元〉，na$\overline{ha}$〈中〉，pa$\overline{ma}$〈浜〉，pu$\overline{ni}$〈骨〉，ṣi$\overline{ju}$〈露〉，ti$\overline{da}$〈太陽〉，ʔuṣi〈臼〉，'u$\overline{ki}$〈桶〉など。

これらの○$\overline{○}$（A）型語が複合語の先行部分となった時，そのアクセントを保存しないこともあるが，○$\overline{○}$（B）型語の場合はアクセントを保存することはない。

(2)　3音節名詞

<u>音節配列別からみたアクセント</u>

3音節名詞を2音節名詞と同様に普通音節と特殊音節との配列から分類し，アクセント型別にまとめた。代表語例および採集語数を示すと表4のようになる。

Hosei University Repository

表4　音節配列別　3音節名詞のアクセント

音節配列 / アクセント型	CVCVCV	CVNCV	CVCVN	CVQCV	CVRCV	CVCVR	合計
○○○	—	—	—	—	—	panaR〈花〉175	175
○○○̄	kukuru〈心〉185	haNge〈考え〉48	tamuN̄〈薪〉14	ʼjaQto〈灸〉34	haRmi〈亀〉94	—	375
○○̄○	hutuba〈言葉〉332	ɬaN̄ma〈母〉56	pusiN〈不思議〉12	—	haRra〈瓦〉91	ʼjaniR〈来年〉22	513
○̄○○	—	paNgwe〈はぐわ〉5	—	ĩweQkwa〈親子〉2	haRra〈川〉62	—	69
合計	517	109	26	36	247	197	1132

3音節名詞のアクセント型は，平板型（○○○），尾高Ⅰ型（○○○̄），尾高Ⅱ型（○○̄○），頭高Ⅰ型（○̄○○）の4種類である。このうち，○○○型は最終音節がR音節のときに，○̄○○型は第2音節がR音節のときおよびN音節やQ音節の時にもあらわれることがある。

普通音節のみのCVCVCV配列では，尾高Ⅰ型（○○○̄）と尾高Ⅱ型（○○̄○）に分かれる。○○̄○型アクセントの採集語数は，○○○̄型のそれよりもはるかに多い。

例）　尾高Ⅰ型（○○○̄）…3音節名詞第4・5・7類の語群の多くが含まれる。

ʔiçiçi〈五つ〉，ʔumuʼi〈思い〉，kagani〈鏡〉（以上第4類），şidaʼi〈簾〉，kukuru〈心〉（以上第5類），kabutu〈兜〉，kuşuʼi〈薬〉，tajuʼi〈便り〉（以上第7類），ʔutuge〈顎〉，ʼjakumi〈兄〉，ʼjukusi〈嘘〉，tutupe〈唾〉など。

尾高Ⅱ型（○○̄○）…3音節名詞1・3・6類の語群の多くが含まれる。

ʔakudi〈あくび〉，kuruma〈車〉，haẓaʼi〈飾り〉（以上第1類），kugani〈黄金〉，pataci〈二十歳〉，miṣaci〈岬〉（以上第3類），garaşi〈烏〉，ʔunazi〈鰻〉，padaha〈裸〉（以上第6類），naşidi〈なすび〉，ʔaşati〈明後日〉，ʼunaʼi〈姉妹〉，gusici〈すすき〉，meheru〈石灰石〉など。

CVNCV配列では，尾高Ⅰ型（○○○̄），尾高Ⅱ型（○○̄○），頭高Ⅰ型（○̄○○）があらわれる。このうち，○̄○○型は表中の例のように「○＋N〈の〉＋○」形式の複合語の例しかない。○○̄○型アクセントは，第1音節も高くなって［○̄○̄○］と発音されることが多い。

Hosei University Repository

例）　尾高Ⅰ型（○○○̄）…guNbō〈ごぼう〉，niNzō〈人形〉，'jaNmē〈病い〉，'uNẓā〈鶉〉，hjaNsō〈笛〉，meNṣā〈細紐〉など。

尾高Ⅱ型（○○̄○）…guN̄za〈鯨〉，tiN̄ci〈天気〉，saN̄za〈馬具〉，maN̄ta〈嶮〉，piN̄gu〈汚れ〉，ṣiN̄ṣi〈膝〉など。

CVCVN 配列では，普通音節のみの配列と同じで尾高Ⅰ型（○○○̄）か尾高Ⅱ型（○○̄○）かであるが，語例は少ない。

例）　尾高Ⅰ型（○○○̄）…guduN̄〈愚鈍〉，zibaN̄〈下着〉，NsiN̄〈二千〉など。

尾高Ⅱ型（○○̄○）…ṣaniN̄〈樹木の名〉，siṣuN̄〈子孫〉，zinaN̄〈次男〉など。

以上のように，CVNCV 配列，CVCVN 配列の語は，普通音節のみの CVCVCV 配列の語とだいたい同様のアクセント現象を示す。従って，N音節はアクセントを考える上では CV 音節と同じような扱いをしてよいと考えられる。

CVQCV 配列では，Q音節にアクセント核がこないから尾高Ⅰ型（○○○̄）か頭高Ⅰ型（○̄○○）かが考えられるが，この音節配列ではふつう○○○̄型アクセントになる。○̄○○型の語は，第1音節脱落によってできた前記 ʔweQkwa〈親子〉の他には，çaQsi〈ツラシ（原野の名）〉1語を確認しているのみである。

例）'juQkā〈四日〉，taQsā〈達者〉，'uQtū〈夫〉，'juQkwī〈夕食〉，ṣaQkwī〈咳〉など。

なお，上表には明示していないが，Q音節が最初にくる語 QsaR〈下〉がある。この発音は現在東地区の古老のみに保たれており，一般には saR と発音されている。

CVRCV 配列では，尾高Ⅰ型（○○○̄），尾高Ⅱ型（○○̄○），頭高Ⅰ型（○̄○○）のアクセントがあらわれる。○̄○○型のアクセントの語は他二型ほど多くみられないが，そのほとんどは共通語との対応が明らかな語である。

例）　頭高Ⅰ型（○̄○○）…dūRsi〈友達〉，hōRzi〈こうじ〉，rūRja〈牢屋〉，ʔaRri〈東（あがるい）〉，'jaRci〈八つ〉など。

尾高Ⅰ型（○○○̄）…'uRnū〈斧〉，raRkū〈楽〉，njaRkū〈脈〉，t'jaRhū〈百〉，keRnjā〈腕（かひな）〉，coRdē〈兄弟〉，n'juRcī〈命〉，k'aRnā〈鞍〉，ṣiRnū〈篩〉，p'oRpō〈食べ物の名〉など。

尾高Ⅱ型（○○̄○）…ʔeR̄zi〈合図〉，ṣiR̄kwa〈西瓜〉，riR̄zi〈礼儀〉，saR̄ni〈虱〉，hoR̄ru〈渡り鳥の名〉，'joR̄ra〈腋の下から腰の上までの部分をさす語〉，meR̄nja〈羊〉，haR̄mu〈白い布〉，kaR̄gi〈姿（蔭）〉など。

CVCVR 配列では，平板型（○○○）か尾高Ⅱ型（○○̄○）かのアクセントであるが，○○̄○型の語は少ない。

例）　平板型（○○○）…2音節名詞第3類および第4・5類の多くの語が含まれる。

ʔiruR〈色〉，ʔudiR〈うで〉，ʔuraR〈裏〉，ʔuniR〈鬼〉，naniR〈波〉（以上第3類），ʔitaR〈板〉，haṣaR〈笠〉，haṣiR〈糟〉（以上第4類），ʔaṣiR〈汗〉，'juruR〈夜〉，ʔamiR〈雨〉（以上第5類），ʔahaR〈垢〉，ʔuniR〈膿〉，nuniR〈のみ〉，ʔacaR〈あした〉など。

<u>複合のしかたからみたアクセント</u>

3音節名詞の多くは単純語であるが，複合の認められる語もかなりある。複合のしかたは，ほとんどが「○○＋○」形式か「○＋○○」形式である。複合語アクセントと成素[註4]アクセント（複合語を構成する要素を成素と呼ぶ）の間には法則性があるようである。

Hosei University Repository

1音節成素は，$\overline{\bigcirc}\bigcirc$型名詞と○○型名詞の第2音節を脱落させた形。2音節成素はこれら$\overline{\bigcirc}\bigcirc$型名詞と○○型名詞の他に○$\overline{\bigcirc}$型名詞や3音節形容詞語幹形などがある（2音節成素については改めて詳述P.36）。

3音節複合名詞のアクセントは，先部成素のアクセントに左右され，先部成素が有核の語ならばその核が保たれ，核のない場合は後部成素にアクセント核がくる。

$\overline{\bigcirc}\bigcirc$型名詞が先部成素ならば，後部成素に関係なくほとんどが$\overline{\bigcirc}$○○型アクセントをとる。

例）tiRdi〈日々〉←tiR〈日〉＋tiR〈日〉

puRja〈船の帆をしまっておく小屋〉←puR〈帆〉＋'jaR〈家〉

'wuRwa〈雄豚〉←'wuR〈雄〉＋ʔwaR〈豚〉

k'waNna〈小縄〉←k'waR〈子〉＋naR〈縄〉

○$\overline{\bigcirc}$型名詞が先部成素ならば，複合アクセントはほとんどが○$\overline{\bigcirc}$○型である。

例）haniçu〈鉄くず〉←hani〈鉄〉＋çuR〈そ〉

panazi〈鼻血〉←pana〈鼻〉＋ciR〈血〉

burima〈群れ馬〉←buri〈群れ〉＋m'aR〈馬〉

ʔaraga〈阿良井戸〉←ʔara〈阿良（地区名）〉＋haR〈井戸〉

○○型および○○○型の名詞が先部成素ならば，○○$\overline{\bigcirc}$型アクセントになる。

例）miRçu〈目くそ〉←miR〈目〉＋çuR〈大便〉

caRde〈小使い銭〉←caR〈茶〉＋deR〈代金〉

'junaha〈夜半〉←'juR〈夜〉＋naha〈中〉

ʔawabu〈栗穂〉←ʔawaR〈栗〉＋puR〈穂〉

panagi〈花の咲く〈樹木〉←panaR〈花〉＋kiR〈木〉

'junija〈弓矢〉←'juniR〈弓〉＋'jaR〈矢〉

平板型アクセント名詞が先部成素で複合アクセントが○$\overline{\bigcirc}$○型となるのは，pasisi〈歯茎〉（←paR〈歯〉＋sisiR〈肉〉）やm'aNkwa〈仔馬〉（←m'aR〈馬〉＋nu〈の〉＋k'waR〈子〉）などごく少数の語である。

形容詞語幹が先部成素の時は，後部成素に関係なく○$\overline{\bigcirc}$○型と○○$\overline{\bigcirc}$型の両方にわかれる。

例）　○$\overline{\bigcirc}$○型

ʔahana〈紫蘇〉←ʔaha〈ʔahaşa赤い〉＋naR〈菜〉

ʔahagi〈赤毛〉←ʔaha〈ʔahaşa赤い〉＋kiR〈毛〉

○○$\overline{\bigcirc}$型

ʔaçiju〈熱湯〉←ʔaçi〈ʔaçişa熱い〉＋'juR〈湯〉

ʔaçibe〈熱灰〉←ʔaçi〈ʔaçişa熱い〉＋peR〈灰〉

(3)　4音節名詞

音節配列別からみたアクセント

4音節名詞を普通音節と特殊音節との配列から分類し，　クセント型別にまとめて，代表語例および調査語数を示すと表5のようになる。N音節は，2・3音節名詞でみてきたように，アクセントを考える上ではCV音節と同様に扱ってよいので，特立せずCV音節の中に含めてある。

Hosei University Repository

表5　音節配列別　4音節名詞のアクセント

音節配列 ＼ アクセント型	CVCVCVCV	CVRCVCV	CVCVRCV	CVCVCVR	CVRCVR	CVQCVR	CVQCVCV	CVCVQCV	計
○○○○	—	—	—	munusiR 〈ユタ〉 2	duRmiR 〈自生〉 1	maQkaR 〈枕〉 8	—	—	11
○○○$\overline{○}$	pukusimu 〈埃〉 286	huRnuçi 〈九つ〉 82	simaRki 〈樹木の名〉 12	—	—	—	maQkane 〈まかない〉 10	şakiQke 〈酒のみ〉 2	392
○○$\overline{○}$○	ɦatadika 〈蛙〉 234	meRrabi 〈女童〉 73	ɦakeRçi 〈蜻蛉〉 12	zitudeR 〈地頭代〉 28	poRcuR 〈調理〉 10	ziQcuR 〈月給〉 3	maQtara 〈蒸〉 6	—	366
○$\overline{○}$○○	'wakubici 〈とかげ〉 187	ɦweRhebi 〈親戚の人たち〉 5	pasoRpu 〈破掃風〉 11	'judajaR 〈よだれたらし〉 7		—		ɦataQsa 〈ちょんまげ〉 2	212
$\overline{○}$○○○	ma'iNpu 〈貝がら〉 5	ɦaRrasi 〈食べものの名〉 69	ɦutiRçi 〈十一〉 4		ɦoRtoR 〈放蕩〉 2				80
計	712	229	39	37	13	11	16	4	1061

4音節名詞のアクセント型は，平板型（○○○○），尾高Ⅰ型（○○○$\overline{○}$），尾高Ⅱ型（○○$\overline{○}$○），頭高Ⅱ型（○$\overline{○}$○○），頭高Ⅰ型（$\overline{○}$○○○）の5種類である。このうち○○○○型と$\overline{○}$○○○型は，2・3音節名詞と同様に特殊な音韻環境にのみあらわれる。前者は最終音節がR音節のとき，後者は第2音節がR音節のときである。

普通音節のみのCVCVCVCV配列では，尾高Ⅰ型（○○○$\overline{○}$），尾高Ⅱ型（○○$\overline{○}$○），頭高Ⅱ型（○$\overline{○}$○○）があらわれる。各型採集語数は表5に掲げたとおり，最終音節にアクセント核をもつ○○○$\overline{○}$型が一番多く，第2音節に核をもつ○$\overline{○}$○○型の語が一番少ない。また，第1音節に核をもつ$\overline{○}$○○○型の語が5語確認されたが，例にあげた語のように第2音節がi母音のものばかりであった。R音節に準じて考えていいかと考えられる。

例）　尾高Ⅰ型（○○○$\overline{○}$）…ʔamagumu〈雨雲〉，ʔawadagu〈粟だんご〉，haratisa〈裸足〉，ʔici'aha〈ふけ〉，ʔicimusi〈動物〉，harazaki〈辛酒〉，ʔamipu'i〈雨降り〉，ʔahaNca〈赤土〉，ʔaNmuci〈あん餅〉，gwaNtaN〈元旦〉など。

尾高Ⅱ型（○○$\overline{○}$○）…şitumiti〈朝〉，ʔupumuzi〈大麦〉，ʔamişiju〈雨露〉，nahagaci〈中垣〉，ʔiçike'i〈五回〉，tici'uşi〈ひき臼〉，'jusiba'i〈寝小便〉，Nkehazi〈向い風〉，şaNpiN〈三品（支那茶の名）〉，şazeNnja〈さざえ〉など。

頭高Ⅱ型（$\overline{○}$○○○）…buribusi〈群れ星〉，hamazika〈鎌柄〉，nicinaha〈道中〉，hasigu'i〈咳〉，ʔaranani〈荒波〉，panada'i〈鼻汁〉，gumabu'i〈こぬか雨〉，ʔahatami〈二かつぎ〉，Nsugami〈みそがめ〉，hariNşa〈枯れ草〉，şikamuN〈憶病者〉など。

第2音節が長音になっているCVRCVCV配列の語はかなりある

Hosei University Repository

が，尾高Ⅰ型（○○○○），尾高Ⅱ型（○○○○），頭高Ⅰ型（○○○○）の順に語例が多く，R音節に核がくる頭高Ⅱ型（○○○○）の語は極めて少ない。

例）　尾高Ⅰ型（○○○○）…çiRtaci〈ついたち〉，koRbiru〈こより〉，miRtice〈額〉，naRjaşe〈葉野菜〉，paRjani〈歯痛〉，şiRkuzi〈すりこぎ〉，çuRgaho〈おしめ〉，'uRziN〈芭蕉布〉など。

尾高Ⅱ型（○○○○）…deRkuni〈大根〉，şiRbaci〈すりばち〉，ʔoRmami〈青豆〉，'juRhuru〈風呂〉，peRhazi〈南風〉，n'jaRmuzi〈小麦〉，suRbusi〈塩干し〉，şoRmiN〈そうめん〉など。

頭高Ⅰ型（○○○○）…ʔeRşaçi〈あいさつ〉，niRguci〈胸〉，tuRguci〈いびき〉，niRdusi〈新年〉，tiRdaki〈樋竹〉，k'aRşini〈暗闇〉，niR'agi〈棟上げ〉，k'eRmuN〈食物〉など。

第3音節が長音になっているCVCVRCV配列の語は多く採集していないが，アクセントは尾高Ⅰ型（○○○○），尾高Ⅱ型（○○○○），頭高Ⅱ型（○○○○）があらわれ，採集語数はほぼ同数。稀に第1音節に核のある頭高Ⅰ型（○○○○）アクセントをとる語がある。これは表例のようにtuR〈十〉とtiRçi〈一つ〉などが結びついてできた語のみである。しかも，中年層以下では後部成素にアクセント核が移り，tutiRçi〈十一〉，tutaRçi〈十二〉などとなる。

例）　尾高Ⅰ型（○○○○）…sipjaRku〈四百〉，siwaRşi〈師走〉，ʔukeRme〈おかゆ〉，naçoRra〈海人草〉など。

尾高Ⅱ型（○○○○）…kuboRşi〈蜘蛛の巣〉，hataRsa〈ちょんまげ〉，ʔukoRru〈線香たて〉，pucaRgi〈星上げ。急に吹く大風のこと〉など。

頭高Ⅱ型（○○○○）…'jureRci〈由来記〉，ʔusuRge〈お供えもの〉，niwaRsi〈三升〉，guteRsi〈御太子〉など。

最終音節がR音節になっている語では，尾高Ⅱ型（○○○○）アクセントになる場合が非常に多い。平板型（○○○○）はごく稀にしかあらわれない。第2音節がR音節の語でも，頭高Ⅰ型（○○○○）になることは少ない。

例）　尾高Ⅱ型（○○○○）…siNduR〈船頭〉，hjakusoR〈百姓〉，hakuzaR〈あごのはった人。hakuzi〈あご〉，namuzaR〈わけのわからぬ奴〉，goRzuR〈強情〉，diRruR〈弱体の人〉，dubajaR〈巨漢。bubajuN 脹れる〉など。

頭高Ⅱ型（○○○○）…haNnjuR〈肝要〉，şumijaR〈染物屋。şumijuN 染める〉，nizijaR〈けち。nizijuN にぎる〉，panamoR〈鼻なし。pana 鼻〉など。

Q音節をもつ4音節名詞はさほど多くない。ことに第3音節がQ音節になる語は，4語しか確認していない。

Q音節が第2音節にくるCVQCVCV配列では，ciQpaN〈血判〉，gaQpa'i〈おでこ〉，niQsuku〈日蝕〉など尾高Ⅰ型（○○○○）か，ʔuQcobu〈白い小さな鳥〉，tiQcaja〈光る虫〉などのように尾高Ⅱ型（○○○○）アクセントになる。最終音節がR音節のCVQCVR配列では，daQcoR〈らっきょう〉，haQsaR〈頭（かしら）〉，miQkaR〈盲目〉のように平板型（○○○○）アクセントになることが多い。第2音節にCV音節やR音節がくるCVCVCVR配列やCVRCVR配列の語が，ほとんど○○○○型アクセントで発音されることと比較して，目立つ現象である。

また，QsaRbe〈疥〉，QsuRna〈海草の名〉，QsaRgi〈下着〉などのように，第1音節がQ音節になる語が数語東地区の古老に残っている。

Hosei University Repository

いずれもQ音節の次はs，第3音節はR音節でQCVRCV配列の語である。

複合のしかたからみたアクセント

四音節名詞では複合語が非常に多く，その中でも「○○+○○」の形式に分解できるものがほとんどである。

2音節の成素には次のものがある。

$\overline{○}$○型名詞・○○型名詞・○$\overline{○}$型名詞・○○○型名詞，$\overline{○}$○型連用形名詞注5・○○型連用形名詞，3音節形容詞語幹，接辞（略記号として，名詞はn，連用形名詞はv，形容詞語幹はaを用いる）。

$\overline{○}$○型名詞と○○型名詞は，第2音節がR音節の語群で，共通語1音節名詞に対応する語が多い。後部成素となった時にはR音節は消滅する。但し，boR〈棒〉のように，共通語1音節名詞に対応しない語のR音節は，そのまま保存される。○○○型名詞は第3音節がR音節の語群で，2音節名詞のうちの「花」の類に対応する語群が含まれる。複合語の成素となる時は，第3音節のR音は消滅する。但し，mujoR〈模様〉やgusoR〈後生，あの世〉など共通語3音節語に対応する語群のR音は，保存されることが多い。

連用形名詞というのは，動詞連用形からの転成名詞である。動詞終止形とは次のように対応する。

連用形名詞　動詞終止形

$\overline{○}$○v ← $\overline{○}$○（頭高Ⅰ型2音節動詞）

○$\overline{○}$（尾高Ⅱ型2音節動詞）

○○v ← ○○$\overline{○}$（尾高Ⅰ型3音節四段活用系動詞）

○○$\overline{○}$○（尾高Ⅱ型4音節一段活用系動詞）

○○v ← ○$\overline{○}$○（頭高Ⅱ型3音節四段活用系動詞）

← ○$\overline{○}$○○（頭高Ⅱ型4音節一段活用系動詞）

3音節形容詞のアクセントは特殊な音節配列語を除いては○$\overline{○}$○型であるが（後記P.76），複合語の成素となる時は，一類系形容詞でその核が保たれることが多いのに対し，二類系形容詞ではその核が保存されることはない。

先後両部の成素アクセントと複合語アクセントとの関係は，おおよそ次のように表示できる（表6）。

+++その組合せでほとんどがその型をとる意。

++　その組合せで多くがその型をとる意。

+　その組合せで少数がその型をとる意。

(+)　その組合せのうち，ある特殊な語のみがその型をとる意。

4音節複合名詞のアクセントと成素アクセントとの関係は，3音節複合名詞と同様に先部成素のアクセントに左右されるようである。先部成素が有核の語であれば複合語アクセントでその核が保存され，無核の語であれば後部成素にアクセント核が移る。

次にその主なものについて具体例を示す。

① $\overline{○}$○型名詞が先部成素ならば，複合名詞のアクセントは後部成素に関係なく$\overline{○}$○○○型をとる。例外はきわめて少ない。

例）peR'iru〈灰色〉←peR〈灰〉+ʔiruR〈色〉

paRgara〈さとうきびをしぼった後のから〉←paR〈葉〉+hara〈穀〉

niR'agi〈棟上げ〉←niR〈棟〉+ʔagi〈ʔagijuN 上げる〉

piRnu'i〈船のへさきに乗る船子〉←piR〈へさき〉+nu'i〈nujuN 乗る〉

Hosei University Repository

表6　複合語アクセントと成素アクセント
—4音節複合名詞—

先部成素 ＼ 後部成素 ＼ 複合名詞のアクセント型		$\overline{\bigcirc}\bigcirc\bigcirc\bigcirc$ 頭高Ⅰ型	$\bigcirc\overline{\bigcirc}\bigcirc\bigcirc$ 頭高Ⅱ型	$\bigcirc\bigcirc\overline{\bigcirc}\bigcirc$ 尾高Ⅱ型	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc\overline{\bigcirc}$ 尾高Ⅰ型
$\overline{\bigcirc}\bigcirc$n	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n	+++			(+)
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n	+++		(+)	(+)
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v	+++			(+)
$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n(A)	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n		++		+
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n		++	+	+
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v		+++		
$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n		+++		
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n		+++		(+)
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v		+++		
$\bigcirc\overline{\bigcirc}$a	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n		++	+	+
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n		++	+	+
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v		++		+
$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n(B)	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n			+	++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n			++	+
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v			(+)	+++
$\bigcirc\bigcirc$n	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n				+++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n			++	++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v				+++
$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n				+++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n			++	++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v				+++
$\bigcirc\bigcirc$v	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n				+++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n			(+)	++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v				
$\bigcirc\bigcirc$a	$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n			+	++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n			+	++
	$\bigcirc\overline{\bigcirc}$v・$\bigcirc\bigcirc$v				+++

② $\bigcirc\overline{\bigcirc}$(A)型名詞，$\bigcirc\overline{\bigcirc}$型連用形名詞，$\bigcirc\overline{\bigcirc}$型形容詞語幹が先部成素ならば，後部成素に関係なくその核が保たれて$\bigcirc\overline{\bigcirc}\bigcirc\bigcirc$型アクセントをとることが多い。ことに，$\bigcirc\overline{\bigcirc}$型連用形名詞のときはほとんど例外がない。

例）gasidusi〈凶年〉←gasi〈飢饉〉＋tusiR〈年〉

dakihubi〈竹壁〉←daki〈竹〉＋hubi〈壁〉

hadi'uci〈祭祀用の紙銭をつくる道具〉←hadi〈紙〉＋ʔuci〈ʔucuN 打つ〉

puginabi〈穴あき鍋〉←pugi〈pugijuN ほげる〉＋nabi〈鍋〉

haribana〈枯れた花〉←hari〈harijuN 枯れる〉＋panaR〈花〉

ʔagiṣagi〈上げ下げ〉←ʔagi〈ʔagijuN 上げる〉＋ṣagi〈ṣagijuN 下げる〉

ʔakiku'i〈開閉〉←ʔaki〈ʔakijuN 開ける〉＋k'u'i〈k'uRjuN 閉じる〉

ʔahabana〈赤花，仏桑華〉←ʔaha〈ʔahaṣa 赤い〉＋panaR〈花〉

haru'isi〈軽石〉←haru〈haruṣa 軽い〉＋ʔisi〈石〉

先部成素が有核アクセントの形容詞でも，$\bigcirc\overline{\bigcirc}\bigcirc\bigcirc$型にならない語もかなりある。

③ $\bigcirc\overline{\bigcirc}$(B)型名詞が先部成素の場合，後部成素が$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$型名詞ならば複合語アクセントは$\bigcirc\bigcirc\bigcirc\overline{\bigcirc}$型が多く，$\bigcirc\overline{\bigcirc}$型名詞ならば$\bigcirc\bigcirc\overline{\bigcirc}\bigcirc$型アクセントになることが多い。$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n（A）型・$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n（B）型の区別は，後部成素に位置するときには複合語アクセントに影響を与えない。

例）　$\bigcirc\overline{\bigcirc}$n(B)＋$\bigcirc\bigcirc\bigcirc$n

'jakudusi〈厄年〉←'jaku〈厄〉＋tusiR〈年〉

Hosei University Repository

tidagaşa〈日暈〉←tida〈太陽〉＋haşaR〈傘〉

basanunu〈芭蕉布〉←basa〈芭蕉〉＋nunuR〈布〉

○○n（B）＋○○n

masumizi〈塩水〉←masu〈食塩〉＋mizi〈水〉

pamaga'i〈浜蟹〉←pama〈浜〉＋ga'i〈蟹〉

ʔatudisa〈後足〉←ʔatu〈後〉＋tisa〈足〉

④　○○型名詞および○○○型名詞が先部成素の場合，後部成素が○○○型名詞ならば複合アクセントは○○○○型になる。

例）ʔeR'iru〈藍色〉←ʔeR〈藍〉＋ʔiruR〈色〉

ziRmami〈落花生〉←ziR〈地〉＋mamiR〈豆〉

panagumi〈神前に洗い清めた米〉←panaR〈花〉＋humiR〈米〉

ʔumukaşi〈甘藷から，澱粉を取った後のかす〉←ʔumuR〈甘藷〉＋haşiR〈かす〉

後部成素が○○型名詞ならば複合アクセントは○○○○型にも○○○○型にもなり，その分かれ方は未詳である。

例）　○○○○型

peRhazi〈南から吹く季節風〉←peR〈南〉＋hazi〈風〉

suRguci〈波うちぎわ〉←suR〈潮〉＋kuci〈口〉

ʔawaşibu〈粟粒〉←ʔawaR〈粟〉＋şibu〈粒〉

'jamanici〈山道〉←'jamaR〈山〉＋nici〈道〉

○○○○型

kiRgu'i〈竹馬〉←kiR〈木〉＋gu'i〈脚〉

çuRgaho〈おむつ〉←çuR〈大便〉＋haho〈ぼろ布〉

durudisa〈泥だらけの足〉←duruR〈泥〉＋tisa〈足〉

panagaci〈花垣〉←panaR〈花〉＋kaci〈根〉

⑤　先部成素が無核の語で後部成素が連用形名詞であるならば，複合語アクセントは○○○○型となる。非常に規則的である。

例）gaRpa'e〈意地のはりあい〉←gaR〈我〉＋pa'e〈pajuN 張る〉

'jaR'uçi〈ひっこし〉←'jaR〈家〉＋ʔuçi〈ʔuçijuN 移る〉

ʔamipu'i〈雨降り〉←ʔamiR〈雨〉＋pu'i〈pujuN 降る〉

paruşici〈畑を馬で耕すこと〉←paruR〈畑〉＋şici〈şicuN 鋤く〉

tumunu'i〈船長〉←tumu〈艫〉＋nu'i〈nujuN 乗る〉

punijani〈骨のふしぶしが痛むこと〉←puni〈骨〉＋'jani〈'janjuN 痛む〉

(4)　5音節名詞

音節配列別からみたアクセント

5音節名詞を，2・3・4音節と同様に音節配列別に考えてみる。普通音節（N音節も含む）のみからなる語であるか，特殊音節を含む配列であるならばそれがどこに位置しているか，に注目して，採集語彙を分類してみると，表7のようになる。

Hosei University Repository

表7　音節配列別　5音節名詞のアクセント

音節配列 ＼ アクセント型	普通音節のみ	第2音節がR音節	第3音節がR音節	第4音節がR音節	最終音節がR音節	第2音節がQ音節	第4音節がQ音節
	CVCVCVCVCV	CVRCVCVCV CVRCVRCV CVRCVQCV CVRCVCVR	CVCVRCVCV CVCVRCVR QCVRCVCV	CVCVCVRCV CVRCVRCV	CVCVCVCVR CVRCVCVR CVCVRCVR	CVQCVCVCV	CVCVCVQCV CVRCVQCV
○○○○○	0	0 0 0 1	0 0 0	0 0	1 1 0	0	0 0
○○○○○̄	95	31 13 1 0	6 0 2	21 13	0 0 0	3	5 0
○○○○̄○	151	67 13 0 0	9 1 0	70 13	23 0 1	6	—
○○○̄○○	5	3 0 4 0	0 0 0	2 0	2 0 0	8	5 4
○○̄○○○	55	4 1 0 0	5 0 2	16 1	9 0 0	—	2 0
○̄○○○○	0	36 2 2 4	0 0 0	1 0	0 4 0	1	0 2

5音節名詞のアクセント型は，平板型(○○○○○)，尾高Ⅰ型(○○○○○̄)，尾高Ⅱ型(○○○○̄○)，中高型(○○○̄○○)，頭高Ⅱ型(○○○○○)，頭高Ⅰ型(○̄○○○○)の6種類である。このうち○○○○○型と○̄○○○○型は特殊な音節配列のときあらわれる。これは2・3・4音節名詞の場合でもいえたことであるが，5音節名詞ではそのあらわれ方が極端である。最終音節がR音節のときあらわれる○○○○○型は，わずか2例しか採集していない。第2音節がR音節のときあらわれる頭高Ⅰ型(○̄○○○○)は，4音節名詞では普通音節のみの配列でも語例が見出せたが，5音節名詞では一例も確認していない。わずかCV̄CVCVRCVの語一例あるのみである。また，○○○̄○○型アクセント語は，どのような音節配列であれ極めて少ない。

普通音節のみのCVCVCVCVCV配列では，尾高Ⅰ型(○○○○○̄)，尾高Ⅱ型(○○○○̄○)，中高型(○○○̄○○)，頭高Ⅱ型(○○̄○○○)があらわれる。但し，○○○̄○○型アクセントの語はわずか5例しか採集していない。ṣaruṣubiri〈さるすべり(樹木名)〉，hamacibaru〈ハマチ原（地名)〉などいずれも使用回数の多くない複合語である。複合度の弱い結合のアクセントかと思われる。この配列では，後から2音節目にアクセント核をもつ○○○○̄○型の語が最も多く，次いで最終音節に核をもつ○○○○○̄型が多い。第2音節に核のある○○̄○○○型の語はさほど多くなく○○○○̄○型語群の3分の1程度である。

例)　尾高Ⅰ型(○○○○○̄)…ʔaṣaṣikama〈未明。早朝〉，miṣikaware〈ひそか笑い〉，paçi'ukusi〈年はじめの初仕事〉，ʔupuẓiku'i〈主作物〉，munu'ubide〈記憶力〉，guso'ugani〈墓ま

Hosei University Repository

いり〉，'jukusimuni〈嘘言〉，tusiNjuru〈大みそか〉，niniNcabu〈こめかみ〉，Ncabutuki〈土仏〉，hanibensa〈こがね虫に似た昆虫〉など。

尾高Ⅱ型（○○○○○）…gusosuga'i〈死仕度，白衣装〉，hisakubusi〈北斗七星〉，ʔisikugani〈みかん，シークワーサー〉，muzibataki〈麦畑〉，paruduma'i〈畑泊り〉，suru'ikuci〈集合場所〉，sugucibata〈波うちぎわ〉，'wara'ikubu〈笑くぼ〉，'wahadiruma〈午前11時頃のこと。（若昼間）〉，ʔahatuNci〈明け方〉，ninikuNza〈つんぼ〉，paraniNcu〈妊産婦〉，siNmenabi〈大なべ。（四枚なべ）〉など。

頭高Ⅱ型（○○○○○）…ʔatumasa'i〈後勝り，後の方が得になるということ〉，dakibucija〈竹葺き屋根〉，gumasigutu〈小仕事，細かい仕事〉，kubu'inici〈でこぼこ道〉，'jahatagusa〈むらさきかたばみ〉，'janadakuma〈悪知恵〉，murapazisi〈村はずれ〉，purimakutu〈ばか正直〉，tisamaNci〈正座〉，ʔasidiNgwa〈私生児（あそびの子）〉など。

第2音節がR音節になっている語は，普通音節のみの語についで多く，尾高Ⅰ型（○○○○○）・尾高Ⅱ型（○○○○○）・頭高Ⅰ型（○○○○○）アクセントの語がほとんどを占める。語数の多いのは○○○○○型である。普通音節のみの配列語では○○○○○型アクセント語がかなりあったが，R音節が第2音節にくると，そのR音節はアクセント核になりにくく，teRhwamuN〈冗談をよく言う人〉，çʔaRtaRçi〈二心（顔二つ）〉などごくわずかの語例しか確認していない。

例）　尾高Ⅰ型（○○○○○）…duRmakanc〈自炊〉，haRkasiju〈干し魚〉，miRkuraga〈目くらみ〉，cuRtuNgwa〈としご〉，tʔaRçiNti〈両手〉，ciRmiRga〈一重まぶた〉，miRzoki〈目の粗いかご〉など。

尾高Ⅱ型（○○○○○）…haRrajaca〈瓦焼き人夫〉，'jaRsazini〈餓死〉，miR'utu'i〈臨終〉，njuR'urumi〈くつわむし〉，toRpubahu〈とうふを固める箱〉，miRtuNda〈夫婦〉，ʔoRpaRgi〈樹木の名〉，zuRbaRhu〈重箱〉など。

頭高Ⅰ型（○○○○○）…duRsibire〈友達づきあい〉，'iRsibaru〈共同でする畑仕事〉，mʔaRrizata〈上等のさとう〉，meRzikuhu〈ふくろう〉，tʔeRhakuzi〈二重あご〉，tʔeRcicara〈体力〉，tʔjaR'idusi〈旱魃の年〉，tʔjuRpaNsa〈おおばこ〉，ʔweRsimuN〈お供え物〉，niRpaNda〈孫と祖父母の三人〉など。

第3音節がR音節になっている語は，ごくわずかしか採集していない。

第4音節がR音節になっている語はかなりある。そのアクセントは，尾高Ⅰ型（○○○○○）・尾高Ⅱ型（○○○○○）・頭高Ⅱ型（○○○○○）の三種類いずれかの型をとるものがほとんどを占め，特にR音節にアクセント核がくる○○○○○型の語がきわだって多い。注目すべき現象である。

例）　尾高Ⅰ型（○○○○○）…ʔaNdaRgi〈油揚げ〉，ʔarazoRki〈穀物選別用の目の粗いかご〉，ʔacineRsa〈商人〉，hjakusoRzi〈百姓地〉，haNzeRja〈鍛冶屋〉，ʔisinjaRgu〈おはじき〉，sakizoRgu〈酒好き〉，curakaRgi〈美人〉，nacineRdi〈泣きまね〉など。

尾高Ⅱ型（○○○○○）…ʔaNmaRhu〈マッコン。やしが

Hosei University Repository

に〉，gazimaR̄ru〈カジマル〉，hubusiR̄mi〈甲いか〉，hunizeR̄ku〈船大工〉，ʔuNzaR̄gi〈ぶらんこ〉，ʔisizaR̄ci〈石垣〉，ʔiNnuR̄kwa〈犬〉，'jumucluR̄ja〈雀〉，kuNzoR̄ri〈こごと。苦情〉，munuhuR̄ja〈物乞い〉など。

頭高Ⅱ型（○○̄○○○）…ʔahagaRra〈赤瓦〉，ʔahajoRne〈夕方少し暗くなった頃〉，matamaRha〈曽孫〉，mucikwaRsi〈餅〉，paçigoRsa〈(古)初げんこつ。元服の時，額をこぶしでうつよろこびのあいさつ〉，saN̄soRgi〈サンショ〉，tiN̄gaRra〈天の川〉など。

最終音節がR音節になっている語は，尾高Ⅱ型(○○○○̄○)アクセントになる場合が非常に多く，平板型(○○○○○)アクセント語はごく稀，第2音節がR音節でも頭高Ⅰ型(○̄○○○○)になることは少ない。

例）尾高Ⅱ型（○○○○̄○）…ʔamimujoR（雨もよう），ʔawatijaR〈あわてんぼ〉，gaNsinjaR〈なべしき〉，'jamatuzaR〈日本茶〉，kudaNṣoR〈ふだん草〉，ṣaNgwanaR〈安女郎〉，suhupudiR〈シュフ稲光，回遊小魚シュフが伊江島沿岸によってくる頃，夜必ず稲光がある，その稲光のこと〉，cimumageR〈心まよい〉など。

頭高Ⅱ型（○○̄○○○）…nahanutiR〈中の日，旧盆14日のこと〉，panadajaR〈鼻ったれ〉，panapagaR〈鼻の皮ふのはげた奴〉，puniNzoR〈不人情〉，ṣani'umuR〈種いも〉，tisajuniR〈歩いて長さをはかること〉など。

Q音節をもつ5音節語はあまり多くない。

第1音節にQ音節がくる発音が，東地区の古老にのみ認められる。

QsaRgisi〈下岸。伊江島裏海岸のきりたった崖〉とかQsaRhata〈下方。農民のこと〉など限られた音韻環境のごくわずかの語に認められるのみである。

Q音節が第2音節にくる配列では，'juQkanati〈さきおとといい〉，maQtiruma〈正午〉のようにQ音節の次の音節に核がある中高型（○○○̄○○）か，また，ʔuQsukubu〈うしくぶ。延髄〉，ʔaQtedu'i〈産どり，雌どり〉のように尾高Ⅱ型(○○○○̄○)アクセントをとることが多い。

Q音節が第4音節にくる配列では，pana'uQca〈綿をうつ人〉，tisapuQka〈足の脹れる病気の人〉のようにQ音節の前に核がある中高型(○○○̄○○)アクセントか，ʔupupaQpa〈ひいおばあさん〉，hata'iQpo〈片一方〉のように最終音節に核のある尾高Ⅰ型（○○○○○̄）アクセントになることが多い。

複合のしかたからみたアクセント

5音節名詞では，そのほとんどを複合語が占めるため，複合アクセントを述べることは4音節名詞以上に重要である。

いろんな複合形式のうち，大多数を占める「○○＋○○○」形式及び「○○○＋○○」形式のものについて考える。2音節成素は前述した（P．20)。3音節成素の主なものは，○○̄○型名詞・○○○̄型名詞・○○̄○型連用形名詞・○○○型連用形名詞である。連用形名詞は動詞終止形と次のように対応する。

連用形名詞	動詞終止形	
○○̄○ v	← ○○̄○○	（頭高Ⅱ型4音節四段活用系動詞）
	← ○○̄○○○	（頭高Ⅱ型5音節一段活用系動詞）

Hosei University Repository

○○○v ↙ ○○$\overline{○}$○（尾高Ⅱ型4音節四段活用系動詞）
↖ ○○○$\overline{○}$○（尾高Ⅱ型5音節一段活用系動詞）

先後両部の成素アクセントと複合語アクセントとの関係を，4音節複合名詞アクセントに準じて表示してみる（表8・9）。

表8　複合語アクセントと成素アクセント
―5音節複合名詞「○○+○○○」形式―

先部成素 ＼ 後部成素 ＼ 複合名詞のアクセント型		$\overline{○}$○○○○ 頭高Ⅰ型	○$\overline{○}$○○○ 頭高Ⅱ型	○○○$\overline{○}$○ 尾高Ⅱ型	○○○○$\overline{○}$ 尾高Ⅰ型
$\overline{○}$○n	○$\overline{○}$○n	++		+	
	○$\overline{○}$○v	++		+	
	○○$\overline{○}$n	++			+
	○○○v	++			+
○$\overline{○}$n(A)	○$\overline{○}$○n		++	+	
	○$\overline{○}$○v		++	+	
	○○$\overline{○}$n		+	+	+
	○○○v		+	+	+
○$\overline{○}$v	○$\overline{○}$○n			+++	
	○$\overline{○}$○v			+++	
	○○$\overline{○}$n		+	++	
	○○○v			++	+
○$\overline{○}$n(B)	○$\overline{○}$○n			+++	
	○$\overline{○}$○v			+++	
	○○$\overline{○}$n			+	++
	○○○v			+	++
○○○n	○$\overline{○}$○n			+++	
	○$\overline{○}$○v			+++	
	○○$\overline{○}$n			+	++
	○○○v			++	+
○○n	○$\overline{○}$○n			+++	
	○$\overline{○}$○v			+++	
	○○$\overline{○}$n			+	++
	○○○v			+	++
○○v	○$\overline{○}$○n			+++	
	○$\overline{○}$○v			+++	
	○○$\overline{○}$n			+++	
	○○○v			+++	

Hosei University Repository

表9　複合語アクセントと成素アクセント
―5音節複合名詞「○○○+○○」形式―

先部成素＼後部成素＼複合名詞のアクセント型		$\overline{\bigcirc}$○○○○ 頭高Ⅰ型	○$\overline{\bigcirc}$○○○ 頭高Ⅱ型	○○○$\overline{\bigcirc}$○ 尾高Ⅱ型	○○○○$\overline{\bigcirc}$ 尾高Ⅰ型
○$\overline{\bigcirc}$○n	○$\overline{\bigcirc}$n		+	++	
	○$\overline{\bigcirc}$v			++	+
	○○○n		+	++	
	○○v				+++
○$\overline{\bigcirc}$○v	○$\overline{\bigcirc}$n		+++		
	○$\overline{\bigcirc}$v		+++		
	○○○n		+++		
	○○v		+++		
○○$\overline{\bigcirc}$n	○$\overline{\bigcirc}$n			+	++
	○$\overline{\bigcirc}$v				+++
	○○○n			+	++
	○○v				+++
○○○v	○$\overline{\bigcirc}$n			+	++
	○$\overline{\bigcirc}$v				+++
	○○○n				+++
	○○v				+++

5音節複合名詞のアクセントは，原則として，先部成素が有核の語であれば複合語アクセントでその核が保たれ，無核の語であれば後部成素にアクセント核が移る。但し，先部成素が2音節連用形名詞であれば，後部成素に何がきても複合語アクセントはほとんどが尾高Ⅱ型になる。また，○$\overline{\bigcirc}$○型名詞が先部成素の場合は，複合語アクセントにその核が保存されないことが多い。5音節複合名詞アクセントは，4音節複合名詞で認められたアクセント法則が適用で

きる場合が多いが，その法則にあてはまらない場合も少なくない。

次にその主なものについて具体的に述べる。

(「○○+○○○」形式の場合)

① $\overline{\bigcirc}$○型名詞が先部成素ならば，複合名詞のアクセントは多くが$\overline{\bigcirc}$○○○○型になるが，後部成素に○$\overline{\bigcirc}$○型の名詞・連用形名詞がくる時には○○○$\overline{\bigcirc}$○型に，○○$\overline{\bigcirc}$型名詞・○○○型連用形名詞がくる時には○○○○$\overline{\bigcirc}$型になる場合もある。

例)　$\overline{\bigcirc}$○○○○型

teRcicara〈大力〉←teR〈力〉＋cicara〈力〉

k'wiRgawa'i〈声がわり〉←k'wiR〈声〉＋hawa'i〈hawajuN 変わる〉

ziR'aNda〈骨の髄にある油〉←ziR〈髄〉＋ʔaNda〈油〉

paRdamuN〈さとうきび葉・いもづる等のたきもの〉←paR〈葉〉＋tamuN〈たきもの〉

○○○$\overline{\bigcirc}$○型および○○○○$\overline{\bigcirc}$型

moR'aşidi〈野あそび〉←moR〈野原〉＋ʔaşidi〈ʔaşidjuN 遊ぶ〉

'iRmaRru〈順番に労力交換を行うこと〉←'iR〈ゆい〉＋maRru〈順番〉

duRhaNge〈自分一存〉←duR〈自分〉＋haNge〈haNgejuN 考える〉

② ○$\overline{\bigcirc}$（A）型名詞が先部成素の場合，複合アクセントは後部成素に関係なく多くの語が○$\overline{\bigcirc}$○○○型になる。しかし，先部成素のアクセントを保存しない語も少なくなく，これら例外的な語は4音節名詞に比べて比率が大きい。

例)　○$\overline{\bigcirc}$○○○型

Hosei University Repository

gasibaNme〈飢饉食糧〉←gasi〈飢饉〉＋paNme〈食糧〉

ʔisiguruma〈さとうきびしぼりの時使われた石車〉←ʔisi〈石〉＋kuruma〈車〉

ʔunigaRmi〈海亀〉←ʔuni〈海〉＋haRmi〈亀〉

murapaʑisi〈村はずれ〉←mura〈村〉＋paʑisi〈paʑisuN はずれる〉

şani'urusi〈種蒔き〉←şani〈種〉＋ʔurusi〈ʔurusuN 下ろす〉

○○○○○型および○○○○○型

miʑiguşu'i〈水薬〉←miʑi〈水〉＋kusu'i〈薬〉

putamaha'i〈蓋つき椀〉←puta〈蓋〉＋maha'i〈椀〉

ʔisibutuki〈石仏〉←ʔisi〈石〉＋putuki〈仏〉

kudatadasi〈裁判の意〉←kuda〈礼〉＋tadasi〈tadasuN 糾す〉

③ 連用形名詞が先部成素の場合は，○○型・○○型どちらがきても，複合アクセントは後部成素のアクセント型に関係なく○○○○○型になることが非常に多い。

例）ʔagidoRpu〈厚揚げ〉←ʔagi〈ʔagijuN 揚げる〉＋toRpu〈とうふ〉

ʔicimabu'i〈生霊〉←ʔici〈ʔicuN 生きる〉＋mabu'i〈魂〉

ʔicimudu'i〈往復〉←ʔici〈ʔicuN 行く〉＋mudu'i〈mudujuN 戻る〉

pagişiburu〈禿げ頭〉←pagi〈pagijuN 禿げる〉＋şiburu〈頭〉

şagiguşu'i〈下剤〉←şagi〈şagijuN 下げる〉＋kuşu'i〈薬〉

pu'işiʑici〈降り続き〉←pu'i〈pujuN 降る〉＋şiʑici〈şiʑicuN 続く〉

④ 先部成素が無核の○○（B）型名詞・○○型名詞・○○○型名詞の時，後部成素が○○○型名詞・○○○型連用形名詞ならば，複合アクセントは○○○○○型になり，○○○型名詞・○○○型連用形名詞ならば多くが○○○○○型に，少数が○○○○○型になる。

例）○○○○○型

tamakunibu〈玉九年母〉←tama〈玉〉＋kunibu〈九年母〉

kubumuşidi〈こぶ結び〉←kubu〈昆布〉＋muşidi〈muşidjuN 結ぶ〉

parusikuci〈畑仕事〉←paruR〈畑〉＋sikuci〈仕事〉

paragawa'i〈異腹〉←paraR〈腹〉＋hawa'i〈hawajuN 変わる〉

kiRgurima〈さとうきびしぼりの時使われた木製の車〉←kiR〈木〉＋kurima〈車〉

suRwata'i〈歩いて渡れる浅瀬〉←suR〈潮〉＋'wata'i〈'watajuN 渡る〉

haniputuki〈神仏〉←hani〈神〉＋putuki〈仏〉

cimumaju'i〈心の迷い〉←cimu〈心〉＋maju'i〈majujuN 迷う〉

miRkagani〈眼鏡〉←miR〈眼〉＋kagani〈鏡〉

durumutadi〈泥あそび〉←duruR〈泥〉＋mutadi〈mutadjuN 玩ぶ〉

○○○○○型

ʔitjazuRte〈その場しのぎのやりくり〉←ʔitja〈伊平屋〉＋suRte〈所帯〉

ʔawameRme〈粟ごはん〉←ʔawaR〈粟〉＋meRme〈ごはん〉

dukugeRsi〈毒消し〉←dukuR〈毒〉＋keRsi〈keRsuN 返す〉

kiRbutuki〈木仏〉←kiR〈木〉＋putuki〈仏〉

'jaRşiku'i〈家普請〉←'jaR〈家〉＋şiku'i〈şikujuN 造る〉

（「○○○＋○○」形式の場合）

① ○○○型名詞が先部成素の時，後部成素が○○型名詞か○○○型名詞ならば，複合アクセントは多くが○○○○○型になるが，

Hosei University Repository

先部成素の原アクセントを保存した○○○○○型の語もかなりある。

例）　○○○○○型

cicaramuci〈力餅〉←cicara〈力〉＋muci〈餅〉

'juda'imusi〈なめくじ〉←'juda'i〈よだれ〉＋musi〈虫〉

garaşamuzi〈燕麦〉←garaşi〈烏〉＋muziR〈麦〉

hwaRhubaha〈破風式の墓〉←hwaRhu〈破風〉＋pahaR〈墓〉

○○○○○型

guçiNkuzi〈五寸釘〉←guçiN〈五寸〉＋kuzi〈釘〉

ʔiNdomami〈えんどう〉←ʔiNdo〈インド〉＋mamiR〈豆〉

後部成素が○○型連用形名詞ならば，複合アクセントは多くが○○○○○型となるが，○○○○○型となる例もある。先部成素のアクセントを保存した○○○○○型になる例は確認していない。

例）pukuzizumi〈福木の皮染め〉←pukuzi〈フクギ〉＋şumi〈şumijuN 染める〉

haRrabuci〈瓦でふいてある屋根〉←haRra〈瓦〉＋puci〈pucuN 葺く〉

şiNkawa'i〈人数割り〉←şiNka〈頭数〉＋'wa'i〈'wajuN 割る〉

後部成素が○○型連用形名詞ならば，複合アクセントは○○○○○型になる。

例）şiburujani〈頭痛〉←şiburu〈頭〉＋'jani〈'janjuN 痛む〉

ʔweRhedume〈親戚訪問〉←ʔweRhe〈親戚〉＋tume〈tumejuN 訪ねる〉

şiNkamuci〈大家族持ち〉←şiNka〈頭数〉＋muci〈mucuN 持つ〉

②　先部成素が○○○型連用形名詞の時は，後部成素に何がきても，複合アクセントは先部成素のアクセントを保存した○○○○○型となる。現調査段階では，例外は一例も確認していない。

例）nubu'inici〈上り道〉←nubu'i〈nubujuN のぼる〉＋nici〈道〉

ʔaga'i〈朝日〉←ʔaga'i〈ʔagajuN 上がる〉＋tida〈太陽〉

ʔabarimuN〈暴れん坊〉←ʔabari〈ʔabarijuN 暴れる〉＋muN〈者〉

ʔaşidiburi〈遊びほうけ〉←ʔaşidi〈ʔaşidjuN 遊ぶ〉＋puri〈purijuN ほれる〉

③　○○○型名詞が先部成素の時，後部成素が○○型名詞か○○○型名詞ならば，複合アクセントは多くが○○○○○型に，少数が○○○○○型になる。

例）　○○○○○型

tiza'inudi〈音痴〉←tiza'i〈左〉＋nudi〈喉〉

'ikigajuta〈男ユタ〉←'ikiga〈男〉＋'juta〈ユタ〉

ʔaNdazisi〈脂身〉←ʔaNda〈油脂〉＋sisiR〈肉〉

'ina'u'uja〈女親〉←'ina'u〈女〉＋ʔujaR〈親〉

○○○○○型

ʔaNdaş ibu〈油壺〉←ʔaNda〈油脂〉＋şibu〈壺〉

meRmeşizi〈ごはんつぶ〉←meRme〈ごはん〉＋şizi〈つぶ〉

ʔata'ibaru〈自宅近くにある畑〉←ʔata'i〈屋敷内の畑〉＋paruR〈畑〉

後部成素が2音節連用形名詞ならば，複合アクセントは○○○○○型である。

例）　mabu'ijuşi〈霊を呼び寄せること〉←mabu'i〈魂〉＋'juşi〈'juşijuN 寄せる〉

'ikigaburi〈男にうつつをぬかすこと〉←'ikiga〈男〉＋puri

Hosei University Repository

〈purijuN 惚れる〉

taRrazimi〈俵詰め〉←taRra〈俵〉＋simi〈simijuN 詰める〉

④ ○○○型連用形名詞が先部成素の時は，複合アクセントはほとんどが○○○○○型になる。但し，後部成素が○○型名詞の場合は，○○○○○型になることもある。

例） ○○○○○型

ʔutusidani〈落胤〉←ʔutusi〈ʔutusuN 落とす〉＋tani〈種〉

ʔahari'u'i〈乳離れ時期〉←ʔahari〈ʔaharijuN 乳離れする〉＋ʔu'i〈折〉

hakusigutu〈隠し事〉←hakusi〈hakusuN 隠す〉＋kutuR〈事〉

t'jaRkimuzi〈押し麦〉←t'jaRki〈t'jaRkijuN 平たくする〉＋muziR〈麦〉

moRkiwaki〈もうけ分配〉←moRki〈moRkijuN もうける〉＋'waki〈'wakijuN 分ける〉

○○○○○型

poRcigara〈ほうきではき集めたごみ〉←poRci〈poRcuN 掃く〉＋hara〈殻〉

ʔawaṣi'uṣi〈合わせ臼〉←ʔawaṣi〈ʔawasuN 合わせる〉＋ʔuṣi〈臼〉

⑤ 語例が多くないので先の表には掲げていないが，○○○型の名詞・連用形名詞が先部成素となる複合名詞は，ほとんどが先部成素のアクセントを保存した○○○○○型になっている。

例）ʔaRrihazi〈東風〉←ʔaRri〈東〉＋hazi〈風〉

'joRpudusi〈豊年〉←'joRpu〈豊作〉＋tusiR〈年〉

duRsibire〈友だちづきあい〉←duRsi〈友だち〉＋pire〈pirejuN つきあう〉

moR'ipani〈元気でとんだりはねたりすること〉←moR'i〈moRjuN 舞う〉＋pani〈panijuN はねる〉

mʔaRridusi〈生年〉←mʔaRri〈mʔaRrijuN 生まれる〉＋tusiR〈年〉

(5) 6音節名詞

6音節名詞のアクセント型は，平板型（○○○○○○）・尾高Ⅰ型（○○○○○○）・尾高Ⅱ型（○○○○○○）・中高型（○○○○○○と○○○○○○）・頭高Ⅱ型（○○○○○○）・頭高Ⅰ型（○○○○○○）の7種類がある。採集語数はさきに表示した（p．3）とおりで，アクセント型によって著しいかたよりがある。平板型と中高型と頭高Ⅰ型の語が非常に少なく，尾高Ⅱ型アクセントの語がきわだって多い。

以下，目だった特徴のみ記す。

音節配列別からみたアクセント

特殊な音節配列のときにのみあらわれるアクセント型は，5音節以下の語と同様に平板型(○○○○○○)と頭高Ⅰ型(○○○○○○)である。○○○○○○型は最終音節が長音音節のときに，○○○○○○型は第2音節が長音音節のときにのみあらわれる。

○○○○○○型の語は，ʔumukuzisiR〈さつまいもすり〉，mamikumasiR〈豆踏ませ〉，ʔacaNjuruR〈明晩〉の3例を確認しているが，このうち第3例は中年層以下では日常最終音節のR音を除いた尾高Ⅰ型ʔacaNjuru の方を用いている。このような最終音節が長音になっている音節配列では，ほとんどの語が尾高Ⅱ型（○○○○○○）アクセントをとる。

○○○○○○型の語は，5音節名詞では46語採集したが，6音節

Hosei University Repository

名詞ではわずか7語しか確認していない。第2音節が長音になっている音節配列でも，○○○○○○型アクセントをとることが多く，次いで○○○○○○型になることが多い。

複合のしかたからみたアクセント

6音節名詞のほとんどは，「○○+○○○○」形式か，「○○○+○○○」形式か，「○○○○+○○」形式かの複合が認められる。4音節複合名詞でかなり明確に認められたアクセント法則《先部成素が有核の語であれば，複合語アクセントでその核が保たれ，無核の語であれば後部成素にアクセント核がある》という原則は，5音節名詞では原則にあてはまらない場合も少なくなかった。6音節名詞では，さらにその原則が適用できる場合，適用できない場合がはっきりしているようである。

次に，アクセント型ごとにその具体例を述べる。

(頭高Ⅰ型○○○○○○)

先部成素が○○型や○○○○型など頭高Ⅰ型アクセントの語ならば，複合語アクセントはほとんどが頭高Ⅰ型（○○○○○○）となる。

例）ʔwiR'umaNcu〈上層階級の人〉←ʔwiR〈上〉+ʔumaNcu〈万人〉

ʒuR'atadika〈おたまじゃくし〉←ʒuR〈尾〉+ʔatadika〈蛙〉

'joRgarimuN〈やせっぽ〉←'joRgari〈'joRgarijuN 痩せる〉+muN〈者〉

その他，duRsibiNca〈友達連中〉やniRçiganuni〈三杯〉のように後部成素が接尾辞である語，またboRcirimuN〈勝手気ままなわがまま者〉のような語構成の明らかでない語もある。

(頭高Ⅱ型（○○○○○○)

「○○○○+○○」形式の複合のうち，先部成素が○○○○型名詞ならば，後部成素にどのアクセント型の2音節名詞がきても，複合名詞はほとんど頭高Ⅱ型アクセント（○○○○○○）である。

例）siputa'imuN〈覇気の乏しい奴〉←siputa'i〈siputajuN 湿める〉+muN〈者〉

ṣaNsiNbahu〈三味線箱〉←ṣaNsiN〈三味線〉+pahu〈箱〉

ṣinamucibaki〈砂運搬用かご〉←ṣinamuci〈砂持ち〉+baki〈かご〉

ʔamamuNʒiki〈甘いもの好き〉←ʔamamuN〈甘物〉+ṣiki〈ṣicuN 好む〉

「○○+○○○○」形式の複合のうち，先部成素が○○型の語で後部成素が○○○○型名詞以外ならば，複合名詞は○○○○○○）アクセントをとることが多い。

例）timakeRmuN〈手間のかかる仕事〉←tima〈暇〉+k'eRmuN〈食べもの〉

paçihaNnja'i〈初雷〉←paçi〈初〉+haNnja'i〈雷〉

hakiguNzuR〈びた一文〉←haki〈hakijuN 欠ける〉+guNzuR〈五十銭〉

purimunu'iR〈たわごと〉←puri〈purijuN 気が狂う〉+munu'iR〈物言い〉

上の第4例のように，先部成素が意味の中心を担っていると考えられるときは，後部成素が○○○○型であっても先部成素のアクセント核を保存した○○○○○○型アクセントになる。

「○○○+○○○」形式の複合のうち先部成素が○○○型の場合，次のように○○○○○○型アクセントになる語もかなりあるが，こ

Hosei University Repository

の複合のしかたでは先部成素の核が消えて○○○○○○型あるいは，○○○○○○型となる語の方が多い。

例）ʔahaṣakaRṣa〈明暗〉←ʔahaṣa〈明るい〉＋kʔaRṣa〈暗い〉

ʔaṣidisikuci〈楽な仕事〉←ʔaṣidi〈ʔaṣidjuN 遊ぶ〉＋sikuci〈仕事〉

dacicagusaN〈ダシチャでつくった杖〉←dasica〈ダシチャ（樹木の名）〉＋gusaN〈杖〉

（中高型○○○○○○・○○○○○○）

中高型アクセントの語は少ししか採集していない。語構成の明らかな語例を次に掲げる。

例）　中高型○○○○○○

ʔaQtaramuN〈大事なもの〉←ʔaQtara〈ʔatarasa 惜しい〉〈muN〈物〉

pa'iṣizimuN〈出すぎた奴〉←pa'iṣizi〈pa'iṣizijuN 才走る〉＋muN〈者〉

pareṣitiẓini〈払すて金〉←pareṣiti〈pareṣitijuN 払いすてる〉＋ẓiniR〈銭〉

ʔupupaRpuzi〈祖父母より以前の先祖〉←ʔupu〈大〉＋paRpuzi〈先祖〉

'junitiQpuR〈武器〉←'juniR〈弓〉＋tiQpuR〈鉄砲〉

中高型○○○○○○型

ʔupusoRnasi〈おじいさま〉←ʔupusu〈おじいさん〉＋ganasi〈加那志（様）〉

ʔwaRbamuniR〈へらず口〉←ʔwaRba〈余分〉＋muniR〈もの言い〉

ʔaṣididuRsi〈遊び友だち〉←ʔaṣidi〈ʔaṣidjuN 遊ぶ〉＋duRsi〈友だち〉

ʔiQpedaQca〈葬送の時，位牌を持つ人〉←ʔiQpe〈位牌〉＋daQca〈dacuN 抱く〉

ruRhaẓamaci〈強い竜巻〉←ruR〈竜〉＋haẓamaci〈竜巻〉

○○○○○○型の語例のうち，ʔaQtaramuN・pa'iṣizimuN・pareṣitiẓini は「○○○○＋○○」式の複合で先部成素のアクセントが保存されている語である。あと２例は，その反対の複合「○○＋○○○○」形式で，ʔupupaRpuzi は後部成素のアクセントがそのまま保存された例，'junitiQpuR は後部成素のアクセント核が消えて最初の音節に核が移動している例である。

○○○○○○型では，上記４例 ʔupusoRnasi・ʔwaRbamuniR・ʔaṣididuRsi・ʔiQpedaQca は「○○○＋○○○」式の複合で，後部成素の第１音節に核がある。あと１例 ruRhaẓamaci は「○○＋○○○○」式の複合で後部成素のアクセントが保存された語である。

上例からわかるように，中高型アクセント語の多くは，後部成素の最初の音節にアクセント核がある。先部成素の原アクセントが保存されるのは，多くが「○○○○＋○○」形式で，先部成素に強調意識が働いていると考えられる語に多い。概して，中高型アクセントをもつ語は日常多用されない語のようである。

（尾高Ⅱ型○○○○○○）

このアクセント型の語は多い。６音節名詞収集語彙の約半数がこ

Hosei University Repository

の型である。「○○○○＋○○」形式の複合で，先部成素が○○○○型の語は，後部成素に何がきても複合アクセントは尾高Ⅱ型（○○○○○○）である。

例）'jaNbarudaki〈山原竹〉←'jaNbaru〈山原〉＋taki〈竹〉

ʔicumaN'u'i〈糸満売り。糸満に身を売られて働かされること〉←ʔicumaN〈糸満〉＋'u'i〈'ujuN〈る〉

ʔuraNdamami〈えんどう〉←ʔuraNda〈オランダ〉＋mamiR〈豆〉

sicigwaçibana〈さるすべり〉←sicigwaçi〈7月〉＋panaR〈花〉

m'aRnupabusi〈南十字星〉←m'aRnupa〈巳の方角〉＋pusiR〈星〉

先部成素が○○○○型であれば，複合語アクセントは○○○○○○型にも○○○○○○型にもなる。○○○○○○型の語例は，先部成素がさらに「○○＋○○」式の複合をしていると認められるのがほとんどであった。

例）t'saRtu'ibira〈草取り用具〉←t'saRtu'i〈草取り〉＋pira〈除草用へら〉

munupusipaẓi〈穀物乾燥用平かご〉←munupusi〈物干し〉＋paẓi〈平かご〉

'juR'akibusi〈明けの明星〉←'juR'aki〈夜明け〉＋pusiR〈星〉

hataṣibada'i〈裾の片方をだらっと垂らした着かた〉←hatasiba〈片一方〉＋da'i〈tarijuN 垂れる〉

「○○＋○○○○」形式の複合がみられる場合，後部成素が○○○○型語であれば，先部成素に関係なく複合アクセントはほとんどが○○○○○○型である。

例）duRguṣamici〈自分勝手に怒り出すこと〉←duR〈自分〉＋kuṣamici〈kuṣamicuN 怒る〉

ʔahadeRkuni〈人参〉←ʔaha〈ʔahaṣa 赤い〉＋deRkuni〈大根〉

nisuduQku'i〈二升どっくり〉←nisu〈二升〉＋tuQku'i〈とっくり〉

ʔuni'a'icaR〈漁民〉←ʔuni〈海〉＋ʔa'icaR〈歩く人。ʔa'icuN 歩く〉

t'saRpurujaR〈フィラリア羅患者〉←t'saR〈フィラリア〉＋purujaR〈ふるえる人。purujuN ふるえる〉

この複合形式でも，先部成素に強調意識が働いたと考えられるごく少数の語（例，purimunu'iR〈たわごと〉←puri〈purijuN 気がふれる〉＋munu'iR〈もの言い〉）は，先部成素のアクセントが保存されている。

「○○○＋○○○」形式の複合では，多くが○○○○○○型アクセントになっている。ことに語例の多い「○○○＋○○○」式の複合語はほとんど例外がない。

例）ʔugumaduRpu〈ごまどうふ〉←ʔuguma〈胡麻〉＋toRpu〈豆腐〉

tirumaniNzi〈昼寝〉←tiruma〈昼間〉＋niNzi〈niNzuN 寝る〉

naNzaziRpa〈銀製かんざし〉←naNza〈銀〉＋ziRpa〈かんざし〉

'ina'u'udu'i〈女踊〉←'ina'u〈女〉＋'udu'i〈踊る〉

guNzugumaR〈どケチ〉←guNzu〈五十〉＋gumaR〈細かい奴。gumaṣa 細かい〉

biRgudatami〈ゐ草畳〉←biRgu〈ゐ草〉＋tatami〈畳〉

先部成素が○○○型語の時，そのアクセントが保存されて○○○○○○型になることもあり（P．59）後部成素が○○○型語の時には○○○○○○型になる例もかなりある。

（尾高Ⅰ型○○○○○○）

このアクセント型の語はかなり多い。6音節名詞では2番目に多

Hosei University Repository

い型であるが，採集語数は一番多い○○○○○○型アクセント語の半数以下である。

「○○○○+○○」形式の複合がみられるものでは，先部成素が○○○○型名詞の時この○○○○○○型になることが多い。

例）duNcu'imuN〈一人者〉←duNcu'i〈自分一人〉＋muN〈者〉

ʔacipatiwaʒa〈手におえない仕事〉←ʔacipati〈ʔacipatijuN あきらめる〉＋'waʒa〈業〉

paNbuNzini〈半死半生〉←paNbuN〈半分〉＋zini〈sinjuN 死ぬ〉

tuzima'iju'e〈落成祝〉←tuzima'i〈tuzimajuN しおわる〉＋'ju'eR〈祝い〉

ʔadaNbaʒina〈アダン網〉←ʔadaNba〈アダン葉〉＋çinaR〈網〉

「○○+○○○○」形式の複合がみられる場合は，○○○○○○型アクセントになることはごく少ない。

「○○○+○○○」形式の複合の場合，○○○○○○型をとることが圧倒的に多いが，後部成素が○○○型名詞の時には○○○○○○型アクセントになることもある。

例）garaşiboRtu〈黒鳩〉←garaşi〈烏〉＋poRtu〈鳩〉

「○○+○○○○」形式の複合がみられる場合は，○○○○○○型アクセントになることはごく少ない。

「○○○+○○○」形式の複合の場合，○○○○○○型をとることが圧倒的に多いが，後部成素が○○○型名詞の時には○○○○○○型アクセントになることもある。

例）garaşiboRtu〈黒鳩〉←garaşi〈烏〉＋poRtu〈鳩〉

ʔacinezoR zi〈商売上手〉←ʔacine〈商い〉＋zoRzi〈上手〉

duRnakaQti〈自分勝手〉←duRna〈自分たち〉＋kaQti〈勝手〉

'jurusiʒikane〈放し飼い〉←'jurusi〈'jurusuN 放す〉＋ʒikane〈şikanajuN 養う〉

4　動詞のアクセント

動詞のアクセントは，名詞に比べて型の数が少なく，各音節動詞通じて基本的には2種類しかない。複合動詞や特殊音節を含む動詞のときは他の型もとりうる。

共通語アクセントとの対応が，5音節動詞まで明らかである。動詞のアクセントは共通語との対応関係を中心に述べる。

2・3音節動詞の［○○］・［○○○］と発音される類は，活用形のアクセントおよび助詞が接続するときのアクセントのあり方から，平板型（○○・○○○）と考えた。

(1)　2音節動詞

2音節動詞のアクセント型は，平板型（○○）と頭高Ⅰ型（○○）の2種類である。

当方言の2音節動詞はごく少なく，現在確認しているのは次の15語のみである。

平板型（○○）…ʔaN〈有る〉，'uN〈居る〉，cuN〈来る〉，njuN〈見る〉，tʔjuN〈乾る，干る〉，tʔjuN〈放る〉，cʔuN〈切る〉以上7語。

頭高Ⅰ型（○○）…suN〈為る〉，njuN〈煮る〉，cʔuN〈着る〉，'juN〈「キル」坐る意〉，'juN〈〈得ル」貰う意〉，'juN〈入る〉，ʔjuN〈言う〉，kʔeN〈食う〉以上8語。

上記15語のうち12語は，共通語2音節動詞のうちの上一段活用及び不規則活用をする動詞に対応する。アクセントの対応関係は次のとおりである。

Hosei University Repository

伊江島アクセント—共通語アクセント注6・例

○○ — $\overline{○}$○ c'uN〈キル（切る）〉

$\overline{○}$○ — ○$\overline{○}$ c'uN〈キル（着る）〉

この対応には例外がない。

(2) 3音節動詞

3音節動詞のアクセント型は，平板型（○○○）と頭高Ⅱ型（○$\overline{○}$○）の2種類である。

例）平板型（○○○）…『国語アクセント類別語彙表』の2音節動詞第2類に属する語が含まれる。

pujuN〈掘る〉，hacuN〈書く〉，huzuN〈漕ぐ〉，nasuN〈産す，産むの意〉，mucuN〈持つ〉，'junjuN〈読む〉，gajuN〈誇る〉，'wazuN〈間をわって進む意〉，ṣinjuN〈潜る意〉など。

頭高Ⅱ型（○$\overline{○}$○）…2音節動詞第1類に属する語が含まれる。

pujuN〈振る〉，ʔicuN〈行く〉，ṣizuN〈注ぐ〉，husuN〈漉す〉，tudjuN〈飛ぶ〉，kunjuN〈汲む〉，'jajuN〈破る〉，pazuN〈配る意〉，nanjuN〈並ぶ意〉など。

3音節動詞採集語彙113語のうち89語は，共通語との対応が明らかである。共通語四段活用系2音節動詞に対応する。アクセントの対応関係は次のようにまとめられる。

表10　3音節動詞のアクセント対応

伊江島アクセント	共通語アクセント	語例	採集語数
○ ○ ○	—$\overline{○}$ ○	……pujuN—ホル〈掘る〉	45 語
	○ $\overline{○}$	……ʔunjuN—ウム〈生む〉	2 語
○ $\overline{○}$ ○	—$\overline{○}$ ○	……pujuN—フル〈振る〉	39 語
	$\overline{○}$ ○	……tacuN—タツ〈経つ〉	3 語

このように，伊江島アクセント○○○型動詞は，共通語$\overline{○}$○型動詞に，○$\overline{○}$○型動詞は○$\overline{○}$型動詞に対応する。例外はわずか5語（5.6%）しかない。例外対応をする語は上記のほかは次の各語である。

伊江島アクセント　共通語アクセント

○○○ — ○$\overline{○}$ …kunjuN〈踏む〉

○$\overline{○}$○ — $\overline{○}$○ …pazuN〈剝ぐ〉，ʔujuN〈織る〉

(3) 4音節動詞

4音節動詞のアクセント型は，尾高Ⅱ型（○○$\overline{○}$○），頭高Ⅱ型（○$\overline{○}$○○），頭高Ⅰ型（$\overline{○}$○○○）の3種類である。このうち，$\overline{○}$○○○型すなわち第1音節に下り核をもつ型は，名詞の項で明らかにしたように第2音節が長音音節のときに限られる。以下に語例を示す。

例）尾高Ⅱ型○○$\overline{○}$○…3音節動詞第2・3類に属する語が含まれる。

tatacuN〈叩く〉，ṣudacuN〈育つ〉，ʔiṣuzuN〈急ぐ〉，pukasuN〈沸

Hosei University Repository

かす〉，ṣubusuN〈蒸す〉，ʔiradjuN〈選ぶ〉，paranjuN〈孕む〉，tabajuN〈束る〉，ʔukijuN〈起きる〉，pukijuN〈間引く〉，tisijuN〈薄くなる意〉，tinjujuN〈捻ねる〉，ʔaNzuN〈あぶる〉，ʔaçejuN〈あつらえる〉，haẓijuN〈耕す〉，huRjuN〈乞う〉，ʔaRsuN〈合わす〉，tizujuN〈冷える〉，kuRsuN〈失敗する〉など。

頭高Ⅱ型○◯○○…3音節動詞第1類に属する語が含まれる。

ṣiẓicuN〈続く〉，hurusuN〈殺す〉，ʔaṣidjuN〈遊ぶ〉，ṣikajuN〈使う〉，tubujuN〈(火が)ともる〉，ʔakijuN〈開ける〉，ṣugasuN〈風を通す意〉，tunuzuN〈跳びあがる〉，munizuN〈撫でる〉，ṣadajuN〈先行する意〉，'jarijuN〈破れる〉，kiNzuN〈削る〉，niNzuN〈眠る〉など。

頭高Ⅰ型◯○○○…3音節動詞第1類に属する語が含まれる。

maRjuN〈回る〉，ṣaRjuN〈触る〉，ʔwiRjuN〈植える〉，k'ʔiRjuN〈暮れる〉，ṣiRjuN〈吸う〉，ṣoRjuN〈添う〉，moRjuN〈舞う〉，'uRzuN〈ゆすぶる〉，ʔweRsuN〈お供えする〉，k'ʔuRjuN〈締める〉など。

4音節動詞採集語526語のうち，313語（59.5%）は共通語との対応が明らかで，213語（40.5%）が明らかでない。対応が明らかでない語は○○◯○型アクセント動詞で123語，○◯○○型動詞で69語，◯○○○型動詞で21語ある。共通語との対応が明らかな313語について，第2音節が普通音節か長音音節か区別してその対応関係をまとめてみると表11のようになる。

表11　4音節動詞のアクセント対応

伊江島アクセント	共通語アクセント	…	語例	採集語数
○○◯○	○◯○	……hakijuN	—カケル〈掛ける〉	143語
	○◯○	……ṣiẓicuN	—ツヅク〈続く〉	7語
	○◯○○	…ĩubijuN	—オボエル〈覚える〉	3語
○®◯○	○◯○	……koRsuN	—コワス〈壊す〉	21語
	○◯○	……maRsuN	—マワス〈回す〉	1語
	◯○	……huRjuN	—コウ〈請う〉	6語
○◯○○	○◯○	……hakijuN	—カケル〈欠ける〉	99語
	○◯○	……ĩibajuN	—イバル〈威張る〉	5語
◯®○○	○◯○	……keRjuN	—カエル〈代える〉	18語
	○◯○	……ṣiRjuN	—スエル〈酸える〉	2語
	○◯	……tuRjuN	—トウ〈問う〉	8語

第2音節がR音節の場合に◯○○○型アクセントが現われるが，これは共通語アクセントとの対応から明らかなように，○◯○○型となるべきところを第2音節のR音節が核をとりにくいため1音節前にずれて◯○○○型になったと考えられる。普通音節のみの配列語と第2音節がR音節配列の語とを合計して，共通語アクセントとの対応を示すと次のようになる。

伊江島アクセント		共通語アクセント		
○○◯○型	172語	—	○◯○型	164語
		—	○◯○型	8語
○◯○○型	124語	—	○◯○型	117語
◯○○○型		—	○◯○型	7語

Hosei University Repository

このように伊江島アクセント○○$\overline{○}$○型動詞は共通語○$\overline{○}$○型動詞に，○○○○型動詞は○○○型動詞に対応する。例外は15語（5.1%）しかない。例外対応をする語は上表に掲げた語のほかは次の各語である。

伊江島アクセント　共通語アクセント

○○$\overline{○}$○ — ○$\overline{○○}$…kurasuN〈暮す〉，'jarasuN〈やらす〉，
ṣarasuN〈晒す〉，cimajuN〈決まる〉，
cigajuN〈違う〉，ciẓanjuN〈刻む〉

○$\overline{○}$○○
$\overline{○}$○○○ } — ○$\overline{○}$○…damasuN〈騙す〉，ṣigunjuN〈噤む〉，
ṣawazuN〈騒ぐ〉，ʔutijuN〈落ちる〉，
huRsuN〈壊す〉

また，第２音節がＲ音節の場合には，表に示したように共通語ハ行四段活用系２音節動詞に対応することがある。伊江島アクセント○○$\overline{○}$○型は共通語アクセント$\overline{○}$○型に，$\overline{○}$○○○型は○$\overline{○}$型に対応する。

さらに，伊江島アクセント○○$\overline{○}$○型動詞が共通語４音節動詞○$\overline{○○}$○型に対応する場合については，第２音節の次のＲ音節が脱落した結果（ʔubiRjuN→ʔubijuN〈覚える〉）であると考えてよい。

(4)　５音節動詞

５音節動詞のアクセント型は，尾高Ⅱ型○○○$\overline{○}$○，中高型○○$\overline{○}$○○，頭高Ⅱ型○$\overline{○}$○○○，頭高Ⅰ型$\overline{○}$○○○○の４種類である。このうち，$\overline{○}$○○○○型は第２音節がＲ音節かＱ音節の場合にのみ現われ，○○$\overline{○}$○○型は第２音節がＱ音節になっている場合と，複合の明らかな場合とに限られる。以下に語例を示す。

例）　尾高Ⅱ型○○○$\overline{○}$○

ʔudurucuN〈驚く〉，tagajasuN〈耕す〉，ʔizukasuN〈動かす〉，'jurukunjuN〈喜ぶ〉，putukijuN〈解ける〉，ṣudaṭijuN〈育てる〉，tudukijuN〈届ける〉，ṣiẓimijuN〈鎮める〉，kuṣamicuN〈腹をたてる〉，dakumicuN〈どきどきする〉，huparasuN〈固める〉，kaṣirasuN〈(酒を)飲ます〉，ʔaṣigunjuN〈汗ばむ〉，ʔudukijuN〈破産する〉，moRkijuN〈儲ける〉，çaRrijuN〈腐る〉，poRrasuN〈這わす〉，ʔaRgujuN〈木を両足ではさんで登る意〉，puQkijuN〈間引きする〉，maQkujuN〈巻きつける意〉など。

中高型○○$\overline{○}$○○

haẓinucuN〈(牛馬を使わず）鍬で耕す意〉，ga'ikunjuN〈口先だけで自慢する〉，kuNnuzuN〈追い越す意〉，pucikunjuN〈吹きこむ〉，heRtujuN〈急に取る〉，tiQpajuN〈ひっぱる〉，paQcijuN〈はち切れる〉，t'aQkunjuN〈ぶち込む〉など。

頭高Ⅱ型○$\overline{○}$○○○

pataracuN〈働く〉，ʔuçiNcuN〈うつむく〉，migurasuN〈めぐらす〉，ʔumuNzuN〈重んずる〉，tatakajuN〈戦う〉，ʔutagajuN〈疑う〉，haṣanajuN〈重なる〉，ṣikarijuN〈疲れる〉，mudurucuN〈人のいろんな機能が衰える意〉，ẓakumicuN〈胸がどきどきする〉，paẓikunjuN〈しびれる〉，ʔaNdijuN〈あふれる〉，hakubijuN〈仕舞う〉，purukijuN〈古くなる〉，ʔusagijuN〈さし上げる〉，turibajuN〈黙る〉，ʔameRjuN〈甘える〉，tareRjuN〈補う〉，paṣeRjuN〈繁る〉，kunaRjuN〈捏ねる〉など。

頭高Ⅰ型$\overline{○}$○○○○

ʔmaRrijuN〈生まれる〉，t'joRgajuN〈広がる〉，tiRracuN〈きつ

Hosei University Repository

〈痛む〉，toRmijuN〈平坦にする〉，haRracuN〈乾く〉，soRzijuN〈生ずる〉，haRmajuN〈腹がすいてへこむ〉，ṣeRkijuN〈よくはかどる〉など。

5音節動詞採集語彙402語のうち，117語（29.1%）が共通語との対応が明らかである。他285語は共通語との対応が明らかでない語あるいは複合の認められる語で，共通語アクセントとの対応を考えることはできない。

共通語との対応が明らかな117語について，アクセントの対応関係をまとめてみると次のようになる。

表12　共通語とのアクセント対応

伊江島アクセント	共通語アクセント	語　例	採集語数
○○○○○	○○○○	…ĩudurucuN　—オドロク〈驚く〉	61語
	○○○○	…mitumijuN　—ミトメル〈認める〉	2語
○○○○○	○○○○	…pataracuN—ハタラク〈働く〉	40語
○®○○○	○○○○	…'çirijuN　—ヤツレル〈窶れる〉	14語

このように，5音節動詞においても共通語アクセントとの対応は明らかである。ことに伊江島アクセント○○○○○型の場合は規則的で，対応語63語中61語までが共通語アクセント○○○○型語であり，○○○○型となるのはわずか2語（3.2%）。○○○○○型の場合は例外対応がやや多く14語（25.9%）ある。

5音節動詞では複合語はさほど多くないが，複合名詞アクセントに準じた法則性は認められる。

先部成素が有核の語であれば，複合アクセントでその核が保たれる。

例）ticinuzuN〈引き抜く〉←tici〈ticuN 引く〉＋nucuN〈抜く〉

kunizasuN〈くみ出す〉←kuni〈kunjuN 汲む〉＋zasuN〈ʔizasuN 出す〉

ʔwiRnuzuN〈追い越す〉←ʔwiR〈ʔwiRjuN 追う〉＋nucuN〈抜く〉

また，先部成素が無核語であれば，複合アクセントは後部成素の第1音節にアクセント核が移る。

例）haẓinucuN〈(牛馬を使わず) 鍬で耕す〉←haẓi〈haẓijuN 耕す〉＋nucuN〈nucuN抜く〉

tu'imacuN〈取りまく〉←tu'i〈tujuN 取る〉＋macuN〈macuN 巻く〉

(5)　6音節動詞

6音節動詞のアクセント型は，尾高Ⅱ型（○○○○○○），中高型（○○○○○○と○○○○○○），頭高Ⅱ型（○○○○○○），頭高Ⅰ型（○○○○○○）の5種類である。このうち，○○○○○○型はわずか3例（peRrinucuN〈入りこむ〉，peRrikunjuN〈踏みこむ〉，tatacikunjuN〈たたきこむ〉しか確認していない。

次に各型所属語彙の特徴を述べ，語例を掲げる。

（尾高Ⅱ型○○○○○○）

採集語数は最も多く62語。単純語でしかも普通音節のみの語も少なくない。

例）ʔaciramijuN〈締める〉，hataẓikijuN〈片付ける〉，tasikamijuN〈確かめる〉，kutaNdijuN〈草臥れる〉，dumaNgijuN〈狼狽える〉，ʔutaṣarijuN〈いやになる〉，ʔaçireRjuN〈誂える〉，simaRrijuN〈仕舞う〉，p'akumekasuN〈(棒などで) ポンポン殴る意〉，guṣumikasuN〈ガリガリ噛む音がする意〉，hanişikijuN〈噛む

Hosei University Repository

意〉，ɔbmirumugejuN〈蛸が色がわりする意〉，ṣiNnugijuN〈すっぽぬける〉など。

（中高型○○○○○○）

この型の語は名詞ではごく少なかったが，動詞では44語採集した。「○○＋○○○○」式の複合が認められる語，第2音節がQ音節である語，また接頭辞 her- をもつ語の例がめだつ。

例）tu'ikurusuN〈取り尽くす〉，kiRkurusuN〈何度も蹴る意〉，nasi'agijuN〈生しあげる。何人か生んで後生まなくなる，の意〉，tiQkakijuN〈引っ掛ける〉，tiQtubasuN〈ひきちぎる〉，tiQcirijuN〈はち切れる〉，t'aQçikijuN〈くっつける〉，ɔuQceRjuN〈ひき返えす〉，tiQkuRsuN〈ひき抜く〉，heRnagijuN〈急に投げる意〉，heRṣikanjuN〈さっと摑む意〉など。

（頭高Ⅱ型⊙○○○○○）

採集語数は49語。単純語で普通音節のみの語もあるが，尾高Ⅱ型ほど多くない。共通語との対応の考えられる語が尾高Ⅱ型に比して著しく少ない。

例）ɔumuNzijuN〈重んじる〉，bacicirijuN〈ひどく難儀する意〉，puṣumurasuN〈燻す〉，ɔuNnjukijuN〈申し上げる〉，ɔusagaNseN〈召し上がる〉，cizeRrasuN〈挫く〉，paneRkasuN〈華やかにする意〉，ɔapeRrijuN〈（酒などが）水っぽくなる意〉，ṣitipoRjuN〈棄て散らかす〉，ticitatijuN〈引き立てる〉，kizimaRsuN〈掻き回す〉，'jutamikasuN〈揺すぶる〉，kuNkurusuN〈（何度も）踏みつける意〉，kuNnubasuN〈ぐっと足を伸ばす意〉など。

（頭高Ⅰ型○○○○○○）

この型の語は第2音節が特殊音節である場合に限られる。名詞に比してQ音節・N音節の語が少なくないのが目立つ。これらは擬音語的なものが先部成素になっており，それが強く発音される語群である。

例）haRrakasuN〈乾かす〉，'joRgarijuN〈痩せる〉，siRkuNsuN〈為損じる〉，ɔwiRpoRjuN〈追い払う〉，doNmikasuN〈ドンと大きな音がする意〉，poNmekasuN〈（井戸などに）ドブンと落ちる意〉，ɔweQteRsuN〈捨てる〉，buQtekasuN〈急にピョンと跳ぶ意〉，goQteRsuN〈ゴクリと飲む意〉，t'aQkwaRsuN〈ひっつける意〉など。

共通語アクセントとの対応は，採集語彙が少ないため明らかでないが，各型の所属語彙および5音節以下動詞のアクセント対応から考えて，伊江島アクセント○○○○○○○動詞は共通語○○○○○○型動詞に，○○○○○○型動詞は共通語○○○○○○型動詞に対応するようである。

複合動詞のアクセント法則については，複合名詞に準じて考えることができる。

先部成素が有核であれば，複合アクセントでその核が保たれる。

例）ɔwiRpoRjuN〈追いはらう〉←ɔwiR〈ɔwiRjuN 追う〉＋poRjuN〈poRjuN ばらまく〉

ɔiRṣikijuN〈言いつける〉←ɔiR〈ɔjuN 言う〉＋ṣikijuN〈ṣikijuN 付ける〉

ṣicikurusuN〈何度も強く突く意〉←ṣici〈ṣicuN 突く〉＋kurusuN〈hurusuN 殺す〉

kizimaRsuN〈掻き回す〉←kizi〈kizuN 攪拌する〉＋maRsuN

Hosei University Repository

〈maRsuN 回す〉

先部成素が無核であれば，後部成素の第1音節に核が移るか，後部成素のアクセント核が生かされる。

例）nasi'agijuN〈生みあげる〉←nasi〈nasuN 生む〉＋ʔagijuN〈ʔagijuN 上げる〉

kiRkurusuN〈何度も蹴りつける意〉←kiR〈kijuN 蹴る〉＋kurusuN〈hurusuN 殺す〉

先部成素が平板型名詞のときは，後部成素のアクセントに関係なく○○○○○○型になることが多い。

例）tiRʒikijuN〈手入れする，大事にする意〉←tiR〈手〉＋ʒikijuN〈çikijuN 付ける〉

ʔirumugejuN〈蛸が色がわりする意〉←ʔiru〈ʔiruR 色〉＋mugejuN〈mugēRjuN 沸騰する〉

5　形容詞のアクセント

沖縄本島および属島方言では，形容詞の終止形は –san，–haN などNにおわる形をしているが，当方言では終止形として ʔahaşa とか habasa のように ʔaN の融合しない形が用いられる。強調される場合には ʔaN が現われ，ʔahaşa ʔaN のように分離した形が用いられる。当方言の形容詞アクセントは–şa, –saにおわる形で考える。

形容詞のアクセント型の数は，動詞よりもさらに少なく，基本的には3音節形容詞から6音節形容詞おのおの1種類である。複合の認められる形容詞や特殊音節を含む形容詞の場合には，他の型もとりうる。

3音節形容詞のアクセント型は，特殊音節を含まない語では尾高Ⅱ型（○○○）1種類である。

例）ʔahaşa〈赤い〉，ʔaçişa〈暑い〉，haraşa〈辛い〉，haʒoşa〈風が強い意〉，kuçişa〈苦しい〉，nageşa〈永い〉，nukuşa〈温い〉，pagoşa〈汚ない〉，curaşa〈美しい〉，habasa〈芳しい〉，'jutasa〈良い〉，şidasa〈涼しい〉など。

R音節が第2音節にくるCVRCV配列の形容詞でも○○○型アクセント語が圧倒的に多く，採集語18語中14語がこの型で，○○○型アクセントになっているのは下に掲げた4例のみである。

例）尾高Ⅱ型○○○…'joRşa〈弱い〉，peRşa〈早い〉，ʔoRşa〈青い〉，m'aRsşa〈旨い〉，cuRşa〈強い〉，'jaRsa〈ひもじい〉，niRsa〈まずい〉，hoRşa〈痒い〉など。

頭高Ⅰ型○○○…huRsa〈細い，小さい〉，k'aRşa〈暗い〉，t'jaRşa〈平たい〉，niRsa〈新しい〉以上4語。

Q音節が第2音節にくるCVQCV配列の形容詞では，アクセント核は後にずれて尾高Ⅰ型（○○○）となる。現在採集しているのは，'waQça〈悪い〉，tiQça〈薄い〉，'jaQça〈安い〉の3語のみである。

このように，当方言ではCVQCV配列の語およびCVRCV配列の一部の語を除いて他すべてが○○○型になる。したがって，共通語アクセント○○○型と○○○型両方とも伊江島方言では○○○型に対応することになる。

しかし，形容詞が複合語の先部成素となった時，アクセントは2種類にわかれる。すなわち，形容詞語幹が複合語の先部成素となった場合，その語幹にアクセント核がくることのある語群と，アクセント核がくることのない語群にわかれる。前者が共通語アクセント○○○型，『国語アクセント類別語彙表』の1類系形容詞であり，後者が○○○型2類系形容詞である。

Hosei University Repository

例)　1類系形容詞が先部成素のとき

ʔahabana〈仏桑華〉←ʔaha〈ʔahaṣa 赤い〉＋bana〈panaR 花〉

ʔaranani〈荒波〉←ʔara〈ʔaraṣa 荒い〉＋nani〈naniR 波〉

haru'isi〈軽石〉←haru〈haruṣa 軽い〉＋'isi〈ʔisi 石〉

ʔamaʒaki〈甘酒〉←ʔama〈ʔamaṣa 甘い〉＋ʒaki〈ṣaki 酒〉

ʔahamami〈小豆〉←ʔaha〈ʔahaṣa 赤い〉＋mami〈mamiR 豆〉

ʔahagani〈銅〉←ʔaha〈ʔahaṣa 赤い〉＋gani〈hani 鉄〉

2類系形容詞が先部成素のとき

gumanici〈小道〉←guma〈gumaṣa 小さい〉＋nici〈道〉

nurumiʒi〈ぬるい水〉←nuru〈nuruṣa ぬるい〉＋miʒi〈水〉

naR'ami〈長雨〉←naR〈nagaṣa 長い〉＋'ami〈ʔamiR 雨〉

purukiʒi〈古傷〉←puru〈puruṣa 古い〉＋kiʒi〈kiʒi 傷〉

ʔoRmami〈ささげ〉←ʔoR〈ʔoRṣa 青い〉＋mami〈mamiR 豆〉

形容詞語幹を先部成素とする4音節複合名詞の多くの語では，上4例のようにアクセント核が保存されることが多いが，下2例のように核が後部成素に移動することもある。音節数の多い複合語ではことに形容詞のアクセント核は保存されにくい。

4音節の形容詞は少なく，19語を採集しているこみである。単純語かつ普通音節のみの音節配列をしている形容詞は，下記6語で頭高Ⅱ型(○○̄○○)アクセント1種類である。

ʔabunaṣa〈危ない〉，ʔaṣamasa〈あさましい〉，ʔatarasa〈惜しい〉，hasimasa〈やかましい〉，hamarasa〈うるさい〉，Nʒogiṣa〈いたいけな〉以上6語。

Q音節が3音節目にくる場合も，kibiQça〈厳しい〉のように○○̄○○型になる。

以上のほかは，ʔweNmiṣa〈ものすごい〉を除いてすべて尾高Ⅱ型○○○̄○アクセントになる。Q音節が2音節目にあるʔaQpaṣa〈味がうすい〉やʔuQkasa〈おかしい〉など，3音節のR音節にアクセント核をもつʔupoRṣa〈多い〉など，複合の認められる形容詞padabusa〈肌恋しい〉など，のごときである。

5音節の形容詞では，普通音節のみの配列でしかも単純語である例は確認していない。単純語は'jagamaQça〈やかましい〉1語を除いて，すべて後から2音節目にRをもつ音節配列でアクセント型は尾高Ⅱ型(○○○○̄○)である。

例) citanaRṣa〈きたない〉，ʔikiraRṣa〈少ない〉，tizuruRṣa〈冷たい〉，'wirukiRṣa〈嬉しい〉，miʒiraRsa〈珍しい〉，muçikaRsa〈むずかしい〉，naçikaRsa〈なつかしい〉，paʒikaRsa〈恥しい〉，ṣikaraRsa〈淋しい〉，ʔuṣumaRsa〈ものすごい〉など。

共通語と対応する語はさほど多くないが，上例citanaRṣaのように共通語4音節形容詞に対応する場合と，naçikaRsaのように5音節形容詞に対応する場合とがある。共通語アクセントにみられる平板型と中高型の区別はなく，伊江島アクセントではすべて尾高Ⅱ型(○○○○̄○)である。

他の音節配列の語はすべて複合の明らかな語である。多くはcimu'icaṣa〈心痛む〉，ziRgupaṣa〈片意地をはった，の意〉のように，後部成素の3音節形容詞のアクセント核が保たれ尾高Ⅱ型（○○○○̄○）になっている。○○○̄型アクセントの3音節形容詞が後部成素のときは，duRjaQça〈楽である〉(←duR〈体〉＋'jaQça〈易い〉）のようにアクセント核が移動して中高型（○○○̄○○）となる。先部成素のアクセント核が保存される語もあり，第2音節がR音節なら

Hosei University Repository

ばşaRdakaşa〈神威のある意〉のように頭高Ⅰ型に，普通音節ならばʔuşi'ahaşa〈うす赤い〉のように頭高Ⅱ型になる。

6音節の形容詞はわずか13語しか採集していない。単純語は尾高Ⅱ型アクセントの'jaQparaRşa〈柔かい〉1語のみである。他はすべて何らかの複合が認められる語で，多くはtaNciraRsa〈短気な〉，ʔawarigiRşa〈あわれっぽい〉のように尾高Ⅱ型になる。その他，頭高Ⅱ型アクセントのmuşikamarasa〈むずかしい〉，中高型のkareRjaQça〈飼い易い〉などの語を採集している。

6　副詞アクセント

副詞のアクセントは，だいたい名詞アクセントに準じて考えてよいが，頭高Ⅰ型アクセントの副詞はほとんどないこと，擬声語のうちには感動詞にみられるような特異なアクセント形態のものがあること，などの点が異なる。

特殊なアクセント形態をもつ擬声語には次のような例がある。音声記号で記す。

例）gawe::〈豚が屠殺されようとしている時のなき声。ブーブーにあたるなき方はgu:gu〉

mbe:: 〈メェー，山羊のなき声〉

mja:u 〈ニャーニャー，猫のなき声〉

tʃi:tʃi: 〈チューチュー，ねずみのなき声〉

kukuguu:: 〈コケコッコー，鶏のときを告げるなき声〉

kodo:kokko 〈コケーコッコッコ〉

ju:dʒuΦi:dʒu〈ホーホケキョ，うぐいすのなき声〉など。

上記擬声語はいずれも2音節ないしそれ以上の音節にわたって高く発音され，低から高への上がり，高から低への下がりの音声差がきわだって大きい。

副詞一般のアクセントについて特徴を述べる。

1音節副詞にn'ʔja〈もう，既に〉がある。全自立語を通じて1音節語はこの1語しかない。

2音節副詞のアクセントは，原則として尾高Ⅰ型(○○̄)アクセントである。

例）duku〈あまり〉，ʔica〈とても〉，'jo'i〈少し〉，mata〈また〉，şigu〈すぐ〉，puda〈あやうく〉，nuN〈何も〉，tada〈たった〉，ʐihwi〈是非〉など。

第2音節がR音節ならば，'juR〈よく〉，t'jaR〈いつも〉のように平板型になる。第2音節がN音・R音の擬音語はbuN〈ビューン。物を投げる時の音の形容〉，p'aN〈パーン，鉄砲の音の形容〉のように頭高Ⅰ型になる例が目立つ。

3音節副詞のアクセントは，尾高Ⅰ型（○○○̄）か尾高Ⅱ型（○○̄○）かである。○○○̄型副詞は26語，○○̄○型副詞は27語採集している。特殊音節Qが第2音節にくる語は○○○̄型アクセントに，R音節が第2音節にくる語は○○○̄型にも○○̄○にもなる。

例）　尾高Ⅰ型(○○○̄)…ʔa'ike〈あんまり〉，tadaci〈まさしく〉，ʔutaki〈非常に〉，ʔicaN〈とっても〉，musiiN〈もしか〉，duRdu〈非常に〉，njaRpi〈もっと〉，siRpe〈じゅうぶんに〉，ʔiQpi〈少し〉，kiQça〈もはや〉，şuQtu〈少し〉など。

頭高Ⅱ型(○○̄○)…gaʐidi〈たくさん〉，'jatusi〈やっと〉，şibiti〈すべて〉，ʔicasi〈いかに〉，şiNtu〈ちょうど〉，caNtu〈ちゃんと〉，zuNni〈本当に〉，haRma〈ずっと〉，'jaRti〈やがて〉，caRke〈すぐに〉など。

Hosei University Repository

平板型（○○○）アクセントの副詞は maziR〈いっしょに〉1例しか確認していない。頭高Ⅰ型（$\overline{○}$○○）の副詞は新しく移入された語 ʔoRpi〈少し〉と，擬音語 pʔiRpi〈ピーピー，笛のなる音〉，go-Qtu〈ゴクッと，勢いよく飲むさま〉のような例しかみつかっていない。

4音節副詞のアクセントは，尾高Ⅰ型（○○○○）か尾高Ⅱ型（○○$\overline{○}$○）か頭高Ⅱ型（○$\overline{○}$○○）かのいずれかである。なかでも○○○$\overline{○}$型の副詞が多く33語，○○$\overline{○}$○型は22語，○$\overline{○}$○○型は17語採集した。平板型（○○○○）および頭高Ⅰ型（$\overline{○}$○○○）アクセントの4音節副詞は確認していない。

○○○$\overline{○}$型副詞では gaşagaşa〈ガサガサと，かきまわす音の形容〉のような畳語形式の擬音語擬態語が多い。同意義で gaşana'i の形も用いられ，これも同じアクセントの○○○$\overline{○}$型である。このような畳語形式の擬音語は，biribiri〈ベトベトと，ゲル状のものの形容〉とか，guşuguşu〈ガリガリと，生いもをかじる時などの音の形容〉など，他のアクセント型をとることもあるが，ごくわずかである。同じ畳語形式の語でも擬音語擬態語でないものは○○$\overline{○}$○型になることが多い。

長音音節Rにアクセント核がくる語例がめだつ。CVCVRCV 形式の音節配列の場合は名詞でも多くR音節にアクセント核がくるが，'iRtaka〈たくさん〉のように第2音節のR音にアクセント核がくるのは，副詞独自の現象である。

例）　尾高Ⅰ型（○○○$\overline{○}$）…butubutu〈ブヨブヨに，小麦粉に水を加えたときのちょうどいい柔らかさの状態〉，gwatagwata〈ベトベトに，ぬかるんだ地面の状態〉，gweRna'i〈じめじめと，poNna'i〈ポンポンと，木の実などが次次に落ちるさま〉，ta-Qta'i〈次第に〉，caQparu〈いつも〉など。

尾高Ⅱ型○○$\overline{○}$○…ʔaQtani〈にわかに〉，ʔumicici〈非常に，とっても〉，daNzuka〈ほんとうに〉，sikaRtu〈はっきりと〉，tukuRtu〈ほっと，安堵したようす〉，haʒihaʒi〈たびたび〉，'jatukatu〈やっとのことで〉など。

頭高Ⅱ型○$\overline{○}$○○…hanaraʒi〈必ず〉，bakuNni〈おおいに，ずいぶん〉，doRdiN〈どうか，どうぞ（許しを求める時や願いごとをするとき）〉，tiRçiN〈一つも，ぜんぜん〉，ʔara'ara〈漠然と〉，nuNhwiN〈何もかも〉，gutaQtu〈ぐったりと〉など。

5音節副詞のアクセントは，尾高Ⅰ型（○○○○$\overline{○}$）・尾高Ⅱ型（○○○$\overline{○}$○）・中高型（○○$\overline{○}$○○）・頭高Ⅱ型（○$\overline{○}$○○○）の4種類である。5音節副詞はあまり多く採集していないが，○○○$\overline{○}$○型アクセント語の多いことがめだつ。また，4音節副詞で認められたR音節卓立傾向は，5音節副詞でも顕著に認められる。

例）ʔicaQpina〈どれくらい〉，muQcana'i〈ネチャネチャと，べとつくさま〉，'jaşitaRma〈易易と〉，maşamaRşa〈まさしく〉，tacinuma'i〈たちまち〉，teRmaRsi〈たびたび〉，ʔicaRsiN〈どうしても〉，durubuQta〈どろどろに〉，'iRnage'i〈永らく〉など。

6音節副詞のアクセントは，尾高Ⅰ型○○○○○$\overline{○}$（例 siNde-siNde〈次第に〉），尾高Ⅱ型○○○○$\overline{○}$○（例 turiduriRtu〈静かに〉），中高型○○○$\overline{○}$○○（例 huRtaRziri〈少し〉），中高型○○$\overline{○}$○○○（例 mariRmariR〈稀に〉），頭高Ⅱ型○$\overline{○}$○○○○（例 şiko'imuko'i〈ああしたり，こうしたり，あわてふためているさま〉）の5種類が認められるが，採集語はごく少ない。

Hosei University Repository

7　伊江島方言アクセントの特色

これまでの考察から伊江島方言アクセントについてまとめてみると，次のようなことがいえる。

当方言のアクセントは下り核だけでとらえることができる（表13）。

表13　伊江島方言アクセントの音韻的型

アクセント型＼音節数		2音節語	3音節語	4音節語	5音節語	6音節語
平板型		○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○
起伏型	頭高Ⅰ	$\overline{○}$○	$\overline{○}$○○	$\overline{○}$○○○	$\overline{○}$○○○○	$\overline{○}$○○○○○
	頭高Ⅱ		(○$\overline{○}$○)*	○$\overline{○}$○○	○$\overline{○}$○○○	○$\overline{○}$○○○○
	中高				○○$\overline{○}$○○	○○$\overline{○}$○○○ ○○○$\overline{○}$○○
	尾高Ⅱ		○$\overline{○}$○**	○○$\overline{○}$○	○○○$\overline{○}$○	○○○○$\overline{○}$○
	尾高Ⅰ	○$\overline{○}$	○○$\overline{○}$	○○○$\overline{○}$	○○○○$\overline{○}$	○○○○○$\overline{○}$

＊動詞　＊＊名詞・形容詞・副詞

平板型と起伏型の頭高Ⅰ型は音韻環境に制限がある。平板型は最終音節が長音（2・3音節動詞終止形の最終音節はN）であり，頭高Ⅰ型は第2音節が特殊音節である語に限られる。

他の起伏型すなわち頭高Ⅱ型・中高型・尾高Ⅱ型・尾高Ⅰ型は，音韻環境上の制限はないが，中高型は複合語にしかあらわれない。

特殊音節とアクセント

長音音節は当方言では成節的であるのが特徴で，アクセント核になりうる。ことに後から2音節目の長音は安定している。しかし，他の位置にある長音はアクセント核になりにくく，核は前にはずれる。

この長音音節は強調意識と関連が深いように考えられる。副詞は日常感情を込めて発せられがちな語類であるが，長音を含む副詞ではどの位置にあってもその長音にアクセント核があり，しかもきわだった卓立式になっている。また，形容詞では4音節の語が極端に少なく，5音節語が非常に多い。5音節の形容詞は複合語以外すべて後から2番目の音節が長音である。「危い」は，ʔabunaṣa・ʔabunaR̄ṣa 両形を確認しているが，このようにもともと頭高Ⅱ型4音節形容詞であったものが，長音が挿入されて5音節形容詞となり，その長音にアクセント核がきて尾高Ⅱ型となって安定したのではないか，と考えられる。

促音音節をもつ語はさほど多くないが，アクセント核は後にずれるようである。名詞・形容詞・副詞では，促音の直前に下がり目があることはごく少ない。擬音語的接頭辞をもつ動詞の場合は，bu-QtekasuN のように頭高Ⅰ型アクセントで発せられる。

撥音音節は普通音節とほとんど違いがない。語頭・語中・語尾どこにも立ちえてアクセント核になりうる。但し，擬音語的接頭辞をもつ動詞は，doNmekasuN のように頭高Ⅰ型アクセントになり，撥音音節の直前に下がり目がくる。

複合語アクセントと成素アクセント

複合語のアクセントは，まず先部成素のアクセントに左右され，先部成素が有核の語であれば複合語アクセントでその核が保たれる。

複合語における，この先部成素アクセント保存の法則は，4音節名詞および5・6音節動詞に顕著に認められ，5音節名詞6音節名詞と音節数がふえるにつれて先部成素のアクセント核が保存されな

Hosei University Repository

い語が多くなってくる。有核アクセントをもつ先部成素でも，複合語アクセントにその核が保存されがちな語群（$\overline{\bigcirc}\bigcirc$型名詞・$\bigcirc\overline{\bigcirc}\bigcirc$型連用形名詞など）と，その核が消滅しがちな語群（$\bigcirc\overline{\bigcirc}$型連用形名詞・$\bigcirc\bigcirc\overline{\bigcirc}$型名詞など）とに分かれるようである。保存されたり消滅したりの語群で先部成素のアクセント核が保存されるのは，その先部成素が複合語の意味の中心を担っていると考えられる場合である。

先部成素が無核語の場合，複合名詞のアクセントは尾高Ⅱ型か尾高Ⅰ型になる。5音節以上の名詞ではことに尾高Ⅱ型になることが多い。複合動詞のときは，後部成素の第1音節にアクセント核がくる中高型になる。複合名詞では，このような中高型になることはごく少なく，しかも多用されない語に限られる。

品詞別にみたアクセント

名詞のアクセント型の数は，《音節数＋1》あるが，所属語彙に著しい片よりがみられる。

1音節の名詞は，他琉球諸方言と同様に当方言にもない。共通語の1音節語に対応する語はすべて長音を伴う。このような第2音節が長音になっている語のアクセントは，平板型か頭高Ⅰ型かである。CV音節およびN音節よりなる2音節の名詞は，わずかの例外を除きすべて尾高Ⅰ型アクセントをとる。国語2音節名詞の第1・2類と4・5類（かなり多くの語が第3類と同じアクセント形態）が統合してしまったことになる。但し，複合語の先部成素となったとき，そのアクセント核が複合語で保存されるA群名詞（第1・2類に対応する語群が含まれる）と，その核が保存されないB群名詞（第4・5類に対応する語群が含まれる）とに分かれる。

3音節の名詞は，普通音節のみからなる語であれば尾高Ⅱ型か尾高Ⅰ型かのアクセント型をとる。第2音節が長音ならば頭高Ⅰ型にもなる。また最終音節が長音のときは平板型アクセントをとる。国語2音節名詞第3類の語と，第4・5類に属するかなり多くの語がこのアクセント型である。

4音節名詞は，ほとんどの語が尾高Ⅰ型か尾高Ⅱ型か頭高Ⅱ型かのアクセントをとる。第2音節が長音であれば，頭高Ⅱ型アクセントは核が前にずれて頭高Ⅰ型アクセントとなる。最終音節が長音のときにのみ平板型アクセントがあらわれるが，第2音節が促音である場合を除き，ほとんどは長音の直前にアクセント核のある尾高Ⅱ型となる。

5・6音節名詞になると，アクセント型によって所属語彙は著しく片寄る。尾高Ⅱ型アクセント語が極端に多く，次いで尾高Ⅰ型，頭高Ⅱ型の順となる。第2音節が長音であれば，頭高Ⅱ型の代わりに頭高Ⅰ型アクセントとなる。

名詞のアクセントは，音節数に関係なく3つのアクセント型に固まろうとする傾向があるように思える。

動詞のアクセントは名詞に比べて型の数が少なく，各音節動詞を通じて2種類である。

2音節動詞は平板型と頭高Ⅰ型

3音節動詞は平板型と頭高Ⅱ型

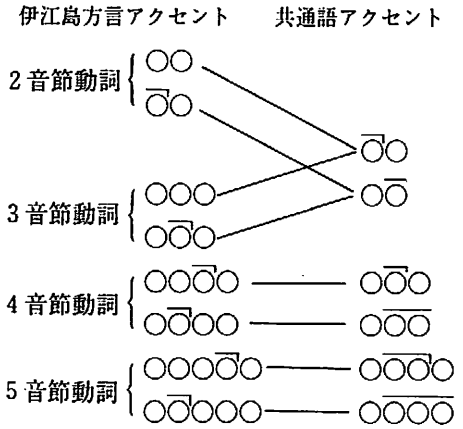
4音節動詞
5音節動詞 } は尾高Ⅱ型と頭高Ⅱ型
6音節動詞

但し，頭高Ⅱ型アクセントは第2音節が長音のときには下がり核

Hosei University Repository

が前にずれて頭高Ⅰ型となる。また，先部成素が平板型の複合動詞は中高型アクセントをとる。

動詞はアクセント対応が明確であるが，当方言でも共通語とのアクセント対応が次のように5音節動詞まで明らかである。



形容詞のアクセントは動詞よりもさらに型の数が少なく，3音節から6音節までの形容詞各々1種類しかない。すなわち3・5・6音節形容詞のアクセント型は尾高Ⅱ型，4音節形容詞は頭高Ⅱ型である。3音節形容詞のうち第2音節が促音の語は，アクセント核が後にずれて尾高Ⅰ型となる。

3音節形容詞の語幹形が複合語の先部成素となったとき，そのアクセント核を保存することのある語群と保存することのない語群に分かれ，現アクセント形態以前は区別されていたと思われる。

4音節形容詞はきわめて少なく，長音音節が挿入されて5音節形

容詞になったのではないかと考えられる。

副詞のアクセントは名詞に準じて考えることができるが，頭高Ⅰ型と平板型の語はほとんどないこと，何音節目にある長音でも卓立の傾向があること，などが特徴的である。

伊江島方言アクセントの位置づけ

当方言アクセントは沖縄諸方言の中でどの位置にあるか，それを考えるために，国語2音節名詞に対応する語群に例をとる。まず，類の統合のしかたから次の五つのタイプに分けてみる。

Ⅰ（1・2類）（3類）（4・5類）
Ⅱ（1・2類）（3・4・5類）
Ⅲ（1・2・3類）（4・5類）
Ⅳ（1・2・4・5類）（3類）
Ⅴ（1・2・3・4・5類）

沖縄本島およびその属島諸方言で，上のどのタイプのアクセント区別がなされているか。これまでに調査された資料[註7]をⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴと分類して各地点へ記入してみると，旧金武間切と読谷山・越来間切とを結ぶ線を堺に，北部のほとんどの地点はⅠタイプのアクセントが行われている。あとのⅢ・Ⅳ・Ⅴのタイプは少数地点に認められるのみである。

北部のアクセントはほとんどがⅠタイプすなわち（1・2類）（3類）（4・5類）の分かれ方をする3型アクセントである。2型アクセントの地点もわずかながらある。Ⅱタイプ（1・2類）（3・4・5類）に区別している東海岸の有銘や汀間などの地点，Ⅳタイプ（1・2・4・5類）（3類）に区別する西海岸の塩屋や津波，本部半島西方海上の伊江島などの地点である。

Hosei University Repository

北部諸地点Ⅰタイプ各語群のそれぞれの音相は，琉球方言アクセントで考えられている祖形アクセントに近い。ことに国頭村・大宜味村が古い相のようで，次に本部半島一帯および属島，となるようである。

Ⅳタイプ地点の音相は，近隣Ⅰタイプの音相に類似しているが，ただ（1・2類）と（4・5類）の区別を失ってしまっているのである。Ⅳタイプアクセントは特異なものではなく，Ⅰタイプアクセント域に生じた一歩変化のすすんだ型と考えるのが適当であろう。

伊江島アクセントは本部半島系北部アクセントのうちの，一歩変化のすすんだ型である。

以上は国語2音節名詞に対応する語群のうちで考えたのであるが，共通語と直接対応しない語にはちがったアクセント形態をとるものもあり，沖縄北部の多くの地点のアクセントは複雑な様相を呈する。しかし，伊江島方言ではそういうちがったアクセント形態はなく，比較的簡単なアクセント体系である。

8　おわりに

以上，現地調査によって得られた5,300余語をもとにして，伊江島方言の語アクセントを一通り記述した。

本稿では，「本節」を「拍」の単位で認め，長音・促音・撥音も1音節として考察した。これら特殊音節を，CV 音節に附属する拍と考え一体のものを「長い音節」とし，CV・CSV 構造の音節を「短い音節」としてアクセントをみなおすと，本稿のとはちがったアクセント体系が得られよう。多地点間で比較したり，歴史的変遷を考えたりするためには，この方でなくてはならない。

筆者は，伊江島方言における音節の型として，CV・CSV・N・Q・Rの5種を認めている[註9]。この「音節」を単位として考えていくことが，当方言アクセントの実態を明らかにする上で有効と考え，特殊音節も1音節として記述した。

本報告を終えるにあたって，永年いろいろ御指導くださっている仲宗根政善先生に心からお礼申し上げる。また，山城文男氏をはじめ調査地伊江島の方々の20年にわたる御協力に対し，厚く感謝の意を表する。

註1．拙稿「琉球伊江島方言の実態」（平山輝男博士還暦記念会『方言研究の問題点』昭45）

註2．拙稿「複合名詞のアクセント―沖縄伊江島方言の場合―」（平山輝男博士古稀記念会『現代方言学の課題』第2巻，昭59）

註3．伊江島方言の音節は次の155個である。語例は次の音韻表記によって記す。
但し，ゼロ音素／ˋ／と喉頭化音素補助符号／ˀ／は，語頭以外では省略した（母音音素の前の／ˋ／は記入）。

Hosei University Repository

/ɔi/	/ɔe/	/ɔa/	/ɔo/	/ɔu/	/ɔja/	/ɔjo/	/ɔju/	/ɔwi/	/ɔwe/	/ɔwa/
[ɔi]	[ɔe]	[ɔa]	[ɔo]	[ɔu]	[ɔja]	[ɔjo]	/ɔja/	[ɔwi]	/ɔwe/	[ɔwa]
/hi/	/he/	/ha/	/ho/	/hu/	/hja/	/hjo/	/hju/	/hwi/	/hwe/	/hwa/
[çi]	[he]	[ha]	[ho]	[Φu]	[ça]	[ço]	[[çu]	Φi]	[Φe]	[Φa]
/'i/	/'e/	/'a/	/'o/	/'u/	/'ja/	/'jo/	/'ju/	/'wi/	/'we/	/'wa/
[ji]	[je]	[a]	[o]	[wu]	[ja]	[jo]	[ju]	[wi]	[we]	[wa]
↓	↓		↓	↓						
[i]	[e]		[ɦo]	[ɦi]						
			↓	↓						
			[o]	[u]						
/pi/	/pe/	/pa/	/po/	/pu/						
[p'i]	[p'e]	[p'a]	[p'o]	[p'u]						
/pʔi/	/pʔe/	/pʔa/	/pʔo/	/pʔu/						
[p'i]	[p'e]	[p'a]	[p'o]	[p'u]						
/bi/	/be/	/ba/	/bo/	/bu/		/bjo/				
[bi]	[be]	[ba]	[bo]	[bu]		[bjo]				
/ti/	/te/	/ta/	/to/	/tu/						
[ti'i]	[t'e]	[t'a]	[t'o]	[t'u]						
/tʔi/	/tʔe/	/tʔa/	/tʔo/	/tʔu/	/tʔja/	/tʔjo/	/tʔju/			
[t'i]	[t'e]	[t'a]	[t'o]	[t'u]	[t'ja]	[t'jo]	[t'ju]			
/di/	/de/	/da/	/do/	/du/	/dja/	/djo/	/dju/			
[di]	[de]	[da]	[do]	[du]	[dja]	[djo]	[dju]			
/ki/	/ke/	/ka/	/ko/	/ku/				/kwi/	/kwe/	/kwa/
[k'i]	[k'e]	[k'a]	[k'o]	[k'u]				[k'wi]	[k'we]	[k'wa]
/kɔi/	/kɔe/	/kɔa/	/kɔo/	/kɔu/				/kʔwi/	/kʔwe/	/kʔwa/
[k'i]	[k'e]	[k'a]	[k'o]	[k'u]				[k'wi]	[k'we]	[k'wa]
/gi/	/ge/	/ga/	/go/	/gu/				/gwi/	/gwe/	/gwa/
[gi]	[ge]	[ga]	[go]	[gu]				[gwi]	[gwe]	[gwa]
/çi/		/ça/		/çu/						
[t'si]		[t'sa]		[t'su]						
/çʔi/	/çʔe/	/çʔa/	/çʔo/	/çʔu/						
[t'si]	[t'se]	[t'sa]	[t'so]	[t'su]						
/zi/	/ze/	/za/	/zo/	/z/						
[dzi]	[dze]	[dza]	[dzo]	[dzu]						
↓	↓	↓	↓	↓						
[zi]	[ze]	[za]	[zo]	[zu]						
/ci/		/ca/	/co/	/cu/						
[t'ʃi]		[t'ʃa]	[t'ʃo]	[t'ʃu]						
/cʔi/	/cʔe/	/cʔa/	/cʔo/	/cʔu/						
[t'ʃi]	[t'ʃe]	[t'ʃa]	[t'ʃo]	[t'ʃu]						
/zi/	/ze/	/za/	/zo/	/zu/						
[dʒi]	[dʒe]	[dʒa]	[dʒo]	[dʒu]						
↓	↓	↓	↓	↓						
[ʒi]	[ʒe]	[ʒa]	[ʒo]	[ʒu]						
/ʂi/	/ʂe/	/ʂa/	/ʂo/	/ʂu/						
[si]	[se]	[sa]	[so]	[su]						
/si/	/se/	/sa/	/so/	/su/						
[ʃi]	[ʃe]	[ʃa]	[ʃo]	[ʃu]						
/ri/	/re/	/ra/	/ro/	/ru/						
[li]	[le]	[la]	[lo]	[lu]						
/rʔi/		/rʔa/								
[l'i]		[l'a]								
/mi/	/me/	/ma/	/mo/	/mu/						
[mi]	[me]	[ma]	[mo]	[mu]						
	/mc/	/mɑ/								
	[m'e]	[m'a]								
/ni/	/ne/	/na/	/no/	/nu/	/nja/	/njo/	/nju/			
[ni]	[ne]	[na]	[no]	[nu]	[ɲa]	[ɲo]	[ɲu]			
↓	↓									
[ɲi]	[ɲe]									
					/nja/		/nju/			
					[ɲ'a]		[ɲ'u]			

/N/ [m, n, ɲ, ŋ]
/Q/ [p, t, k, ʃ]
/R/ [i, e, a, o, u]

註4．成素という用語は，和田実氏がご論考「近畿方言に於ける複合名詞のアクセント形態」（『音声学協会会報』71，昭17）の中でお使いになったのを，使わせていただいた。

註5．連用形名詞という用語は，西尾寅弥氏がご論考「動詞連用形の名詞化に関する一考察」（『国語学』43，昭36）の中でお使いになったのを，使わせていただいた。

註6．共通語アクセントの表記は，金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』（秋永一枝，昭33）に従った。

註7．次の諸資料に基づく。

上村幸雄「琉球”諸方言における＜1・2音節名詞”のアクセント概観」（『ことばの研究：国立国語研究所論集』昭34）

金田一春彦「アクセントから見た琉球諸方言の系統」（『東京外国語大学論集』第7号，昭35）

大山成子「琉球方言における2音節名詞のアクセント」（『琉球方言』第4号，昭37）

平山輝男（大島一郎，中本正智共著）『琉球方言の総合的研究』明治書院，昭41）

琉球方言研究クラブ「沖縄県伊平屋我喜屋方言の音韻体系」（『琉球方言』第14号，昭52）

上村幸雄「沖縄方言のアクセント」（沖縄言語研究センター：公開講演昭59）

なお，拙稿「沖縄諸島（属島）の方言」（『講座方言学10：沖縄・奄美の方言』昭59）において，沖縄諸方言の2音節名詞アクセントについて言及した。

Hosei University Repository

註８．仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店，昭58

上村幸雄『単語のリズムアクセント的構造の分析方法について一今帰仁与那嶺方言を例として』（沖縄言語研究センター資料No39，昭58）

日下部文夫「沖縄北部方言における１音節名詞アクセントについて」（『講座方言学10：沖縄，奄美の方言』，昭59）

註９．註１に掲げた拙稿および「伊江島方言の音韻」（未刊）